これからの日本宣教のために

2018 年 8 月 15 日
西九州伝道所
佐々木正明

はじめに

日本のキリスト教宣教は、悪戦苦闘を強いられてきました。これからも伝道はますます難しくなり、クリスチャンの数は激減し、教会も次々と閉鎖されるか、活動に支障をきたす状況に追い込まれることでしょう。今の日本の宗教事情の厳しさは、何もキリスト教だけに限ったことではありません。宗教人口全体が低下傾向をたどり、特に地方の寺社の多くは、キリスト教会と同じ運命をたどると予測されています。とはいえ、いまだ日本に根付いていないキリスト教の凋落は、特に顕著です。筆者はこれまで、日本の宣教の停滞の理由として、主に歴史的な経緯に根差す日本人の反キリスト教感覚と、日本の実情に合わない古い西洋式の教会形態と、伝道方式について、時と場をかえていく度も語ってきました。

歴史的には、戦国時代の終わりから徳川時代にいたるころの宣教も（カトリック）、徳川から明治に至る宣教も（プロテスタントとカトリック）、共に西欧キリスト教諸国の殖民地政策の手先、あるいは植民地政策と手を組んだものとして、行われた事実がありました。これが日本の為政者たちの疑いと嫌悪を呼び、キリスト教を排激することになりました。徳川幕府は仏教を利用して徹底した弾圧を試み、文字通り殲滅してしまいました。明治政府の為政者たちも、西欧の進んだ文明文化は取り入れても、その柱であるキリスト教は、残虐な宗教として排除しようと試みました。彼らは開国前後の世界を見聞し、キリスト教国の植民地政策や奴隷売買の非人道性を目の当たりにして、恐怖を感じたのです。そのために、明治 4 年に認められた信教の自由にも、キリストは排除されています。明治政府が諸外国の圧力に屈して、つまり、いやいやながら、キリスト教も信教の自由の下に置いたのは、それから 2 年後のことです。明治政府は、西欧の精神的基礎としてのキリスト教に代わるものが、日本にも必要だと踏んで、復古神道を取り入れ、天皇制にからめて国家神道として、新しい日本建国の精神的礎としたのです。徳川時代に優遇された仏教は、その優遇のゆえに堕落したと判断され、排除されて廃仏毀釈に至りました。

明治時代と大正時代のキリスト教宣教は、徳川時代に一般庶民の間に刷り込まれた、キリスト教に対する疑心暗鬼と恐怖心、さらに政府の反キリスト教的態度にもめげず、全体的にはよくやったと思われます。ただ、当時英米で盛んになった、キリスト教のすぐれた文化を

持って世界を覆い、キリストの再臨を待つという、福音宣教とキリスト教文化の伝播を一つにした、千年期後再臨説を採る近代キリスト教感覚のために、日本人の反感を買ってしまいました。学校や病院その他の慈善分野での、宣教師の働きはそれなりに評価できても、宣教師たちに刷り込まれていた日本文化に対する敵愾心、日本全体に対する優越感、あるいは日本人に対するパターナリズムという形を変えた優越感のために、日本人の心の奥までは入り込むことが出来なかったのです。

そのような態度が一変したのは、第二次大戦の敗戦後のことです。鬼畜米英と憎まれ恐れられていたアメリカ兵の多くが、人道主義、博愛主義に倣って友好的であったことです。アメリカの民主主義と自由の意識が、それまで軍国主義で苦しんできた日本を開放しました。さらにたくさんの救援物資が送られて来たり、フルブライト奨学金制度が整えられ、多くの貧しい日本人がアメリカでの教育を受けることが出来るようになったりしたために、日本人はアメリカ人を愛し、尊敬の念を抱き始めました。アメリカという国にあこがれ、アメリカの精神はキリスト教だと考えて、キリスト教を受け入れる人が多くなったのです。そこには、マッカーサーが意図的にキリスト教を助け、日本をキリスト教化しようと考えたという背景もありました。3000 人に及ぶ宣教師が招かれ、一説では 1000 万冊の聖書が送られて来たということです。

しかし日本人のアメリカ礼賛は、日本人クリスチャンの増加には結び付きませんでした。その上、1964 年のトンキン湾事件に始まるベトナム戦争によって、アメリカに対する日本人の意識は、まったく変わってしまいました。（宣戦布告がなかったため、始まった日時には諸説あり）　アメリカが数々の非人道的なことを行いながら、ついに敗戦してしまったことによって、日本人のアメリカに対する畏敬の念は消し飛んでしまいました。アメリカの精神的柱と目されていたキリスト教に対する憧れ、あるいは尊敬の念も、当然のことながらどんどん薄れて行ったのです。ですから戦後の日本の宣教のピークは、ベトナム戦争におけるアメリカの非人道的活動が、まだ隠されていた時期に重なります。

ベトナム戦争がアメリカの惨敗に終わり、アメリカの倫理もたいしたことがないという、一種の失望感が広がったことにより、キリスト教に対する憧れもどんどん消えて行きました。その後も、アメリカが直接間接に関係した多くの戦いにおいても、日本人はアメリカ人の醜さを次々と見せられました。いまや、アメリカの繁栄と享楽の文化にあこがれる者はいたとしても、アメリカの精神と目されるキリスト教に、憧憬を持つ日本人はほとんどいなくなったのです。それはこれからも続くことでしょう。現在の日本人の多くは、日本にはキリスト教は無用だと考えています。キリスト教がなくても、自分たちの国はここまでやって来たと自信を持ち、キリスト教のない今の日本にかなり納得しているのです。

教会の形態としては、筆者はフィリピンにいた時代から、「いつでも、どこでも、だれでも、なんでも」という伝道を提唱し、それを妨げている伝統的教会形態を捨てるようにと語り、それを実践してきました。日曜日に膠着する伝道の欠点と神学的誤り、教会堂に限られる伝道と教会堂を中心とする神学的誤り、さらに牧師や宣教師という聖職者に限られた伝道の弊害とその神学的誤り、さらに、説教という福音の伝達方法の欠点とその聖書的脆弱さなどについて、折に触れてお話ししてきました。

最近に至って、筆者と同じ見解の方々が現れ、危機感を煽り、何らかの対処法を語っておられるのを見て、やっとここまで来たかという思いと共に、「もう遅すぎる」という感慨も深めています。20 年ほども前から筆者は、あと 15 年もしたら、私たちの教団の教会のうち三分の一は存在できなくなると、少々大げさに語って、危機感を持ってもらおうとしてきました。幸い筆者の大げさな言い方は外れて、私たちの教団ではまだ何とか、教会の数を保持し続けています。でもそれも限界となっています。私たちの教団には定年がなく、70 を過ぎ 80 を超え 90 に手の届いた牧師たちが、現役で働き続けておられますが、それもあと数年の事でしょう。今や、伝道者になろうとする若者は激減しています。救われる人が少なくなっているのです。

ただしそういう現状の中で、筆者は決して悲観的になってはいません。かえって今の窮状が将来への良い踏み台となることを願い、期待しています。いまの先の暗い状況から、真剣に考えだされる日本宣教への様々な理解と方策が、必ず大きな力となると予測するからです。そこで筆者も、今までの日本宣教についての考察を土台として、さらに重要な事柄について語り、将来の力強い宣教への一助になればという、願いと希望の表明にしたいと思います。

Ⅰ．　日本人の宗教感覚

何につけても、「日本人の」というタイトルをつけると、日本人を良く知っていることを前提とするか、日本人そのものを論じることから始めなければなりません。でも、その「宗教意識」となると、あまり一般の人の興味を引く問題でもなく、私たち、日本の福音宣教を考える少数の者の立場からすると、内容のある学びにお目にかかることも、ほとんどないのが現状です。

日本人の宗教意識について、論理的に考えるといっても、とても複雑雑多で一筋縄ではいきません。日本人の宗教意識に、筋道が見えないからです。でも、この日本人に福音を伝えるという、至上の使命を遂行するためには、何としても、日本人そのものの宗教意識を知ら

なければなりません。最高の味付けのスープであっても、みそ汁の中にそのまま混ぜ込んでは、美味しいスープにはなりませんし、みそ汁もだいなしになってしまいます。

これまでの、日本における宣教の挫折は、日本人を知らず、その宗教意識も理解しようとせず、日本人とは何かということにまったく興味を抱かないままに、福音を語って来たことにもよります。しかもその福音が純粋な福音ではなく、西欧文化との混ぜ物だったのです。まず、日本人を「救われなければならない罪人」という、福音主義的な「マジックワード」で、ひとくくりにして来たことが問題です。日本で伝道を試みた人達のほとんどは、日本文化を「変えられなければならない罪人の文化と」、単純に決めつけてきました。西欧文化に合わせて理解された、福音という美味しいスープを、そのまま日本のみそ汁文化に投げ入れて、失敗したのです。それで、面倒だからみそ汁をみんなぶちまけて、空っぽにした器に美味しいスープを入れようという、無茶な試みさえありました。日本の宗教文化をみな悪者にし、敵視し、破壊しようとして来たのです。日本における福音宣教のすべてがそうだったのではないと、反論が出るのもわかりますが、全体的に見るとそうであったし、今でもそういう傾向を強く持っています。

雑多な血筋の交じり合った日本人

「日本人の」と一言で括っても、日本人は純粋な一つの民族ではありません。現在では普通、日本に生まれ住んで日本語を話す人たちを、何の疑いもなく日本人と呼んでいますが、不思議といえば不思議です。歴史をたどると、南から北からそして西側から、様々な民族がそれぞれの生活様式抱えて、長期的に見ると「ひっきりなしに」日本列島に訪れ住んで、互いに交じり合いながら生活を築いてきました。それらの民族の中には、紀元前 8 世紀に、アッシリアに滅ぼされたイスラエル人の末裔も、含まれていた形跡さえあります。それが、どうしてこのような共通性のある文化を形成してきたのか、大変興味深いのですが、いまとなっては想像する他はありません。ただ、狩猟を中心とした縄文文化から、稲作を中心とした弥生文化に移ったことにより、共に困難な水田増設に長期間力を尽くすという、かなり定住性が強い生活様式となる一方、取り巻く荒海に移住民族の数も程よく限られていた環境が、大きく影響したのだろうとは言えるでしょう。

かなり共通した宗教意識

世界中に共通した宗教意識には、普通アニミズムと呼ばれるものがあります。定まった理解や、整った考え方があるわけではありませんが、一般的に、この人間が住む世界には、様々な霊的存在が共存していて、良くも悪くも人間生活に影響を与えていると考えます。またこれらの霊的存在の多くは、石や木やその他の自然物に隠れ潜むと思われ、人間を始め動物の

中に入り込んで支配する、「憑依」という考え方も一般的です。それらの憑依された人間の多くは、霊的世界に通じるようになり、口寄せをしたり、天意を伝えたりするシャーマンの働きをするようになります。古代の日本に移住してきた民族たちの多くも、多分にこのような宗教感覚と、それに見合った行事を共有していたのではないかと考えられます。

ほとんど気付かれていない感覚

それと同時に、普通日本人と言われる私たちの中には、これとはまったく別の宗教意識があることに注意しなければなりません。それは、かなり強固に存在する感覚ですが、一方ではほとんど気付かれずにいる意識です。日本での福音宣教が挫折を続けている最大要因の一つが、この日本人自身が気付かずにいる意識に、宣教する側もまたまったく気付かないまま、これに敵対するような宣教を進めて来たからです。多くの日本人には気付かれないままでいながら、日本人の宗教感覚を強く支配しているものは、一神教的感覚です。驚くべきことに、日本人の多くは、唯一絶対に近い存在者を感じて、その感覚に従って行動しているのです。くり返しますが、この感覚は剥き出しに現れて、日本人の生活を制御するほどのものでなく、むしろ、当の本人が気づかないほど、静かに深く、しかも薄もやの中に隠れたように存在していながら、日本人の宗教感覚と倫理感に強い影響を与えているものです。

日本人の表面的宗教意識

普通、日本人は「八百万の神々」に象徴される、多神教を奉じていると言われますが、それは日本人の宗教感覚の表面を一瞥しただけで、奥にまで目が届いていません。表面的には、確かにアニミズムの世界で、自然物あるいは時には人造物にまで宿る霊たちを神格化し、畏れたり大切に扱ったりしますが、そこに登場する神々は、現代人の感覚からするとあまりにも馬鹿げているために、現代日本人の多くは「神」、あるいは「神々」を放棄してしまって、真面目に信じてはいません。（日本語には単数と複数の別がないために、少しばかり混乱しますが・・・・。） 多くの現代日本人にとって、「神」あるいは「神々」とは愚かな存在、古の人々の恐れと空想の産物であって、実在しないものです。少し古い統計ですが、神の存在を信じていない日本人は 70 パーセントを遥かに超え、最も無神論的な民族だとさえ言われているのです。（統計ほど信頼できないものはない、とも言われますが。）

日本語の「神」

もともと日本語の「神」とは「うえ」という意味であって、「高きところにおわす方」のことだといわれています。異なった意見を持つ言語学者もいますが、筆者は社会学的考察も含めたこの意見がより事実に近いと思います。普通の人間よりも、少しばかり何かに優れて

いるならば、誰でもその分野で、より高い存在である「かみ」となれたものです。権威をもった役所は「御上」であり、役職の高い武士は、「頭＝かみ」や「守＝かみ」という官位を与えられました。頭の毛は「上の毛」であるため「髪の毛」であり、我が家の女房殿は家庭の実権を持っているため「内のカミさん」であり、旅館や料亭を仕切っているのは「女将」で、すべて「かみ」です。ですから、少し物事を上手にする者は、すぐその分野の神となれるのです。野球の神様、釣りの神様です。数年前には「神ってる」という新言がはやりました。このようにして無数にいる神々は、時には小競り合いも起こしますが、おおむね平和に共存してきましたし、ある程度分業化も進んできました。縁結びの神もあれば、商売繁盛の神もあります。

日本人の曖昧な宗教意識と感受性

そのような宗教意識は、現代の日本人には愚かなものであり、誰も事実としては信じていませんが、それでも、祭儀的な意義や縁起的な理由付けをし、そこに価値を見つけています。また、実際は愚かだと考えている日本人の複数の神々への信仰を、どんな宗教でも相手が戦いを挑みさえしなければ受け入れ、平和に共存しようとする優れた者であり、平和国家日本の精神的基礎であるとさえ考える人たちさえいます。そのようなことがまかり通るのは、日本人の宗教意識があいまいだからでもあります。このあいまいな日本人の宗教意識で非常に大切なのが、普段は神という言葉では表現されない「気高く、見ることも、触れることも、説明することも、想像することもできない存在」、あるいは「お方とも言うべき存在」への意識です。神の存在を否定し、無宗教を自認する日本人はたくさんいます。ところがその人たちでさえ、決して宗教そのものを悪しざまに言ったり、宗教心自体をけなしたりはせず、かえって大切な物と認めます。それは、日本人の多くがこのような宗教意識を認め、その意識の中にある気高いお方の存在を感じ、その感覚を尊んでいるからです。

このお方はあまりにも気高く大きいために、人間の理性では把握できないし、言葉や想像力でも描き出すことさえできないために、このお方を説明する教義や神学はありません。またそのお姿を描いたり刻んだりする偶像もありません。日本人はこの想像を絶する気高く清らかで大きく力強く、あらゆるものを支配し、良い者にも悪い者にも太陽を昇らせ雨を降らせ、作物を稔らせ家畜を肥やせ、海に山に命あるものを満たしておられるお方を感じ、その感覚を大切にする強い宗教意識を持っているのです。それは理屈でも理論でもなく、まさに感覚です。感受性です。そして折に触れてはこのお方に命を頂いている、生かしていただいていると感じて、感謝の念を抱くのです。

すべての物に霊が宿っている、あるいは神が宿っていると感じている、アニミズム的神観、多神論的神観を持っている日本人も、それらの多くの神々や霊とは別の、異なった、あるい

はまったく次元の違う存在者、むしろ唯一の存在ともいうべき「者」、「心を持った存在者」さえ感じているのです。ただこれらの霊的存在者が、どういう秩序と序列で住み分けをしているのかは、まったく不明で雑然としたままです。

神ではない神、神以上の神

日本人はこの唯一至上の存在を感じていても、その存在を神とは呼びません。お名前さえないのです。神と呼んでしまっては、冒涜に当たると感じているのかもしれません。私たちクリスチャンが信じているお方も同じです。「神」ではないのです。神ではない神、神以上の神であって、日本人の意識に非常に近いのです。そういう意味では、日本の最高神と言われる天照大御の神さえ、一段低い神なのです。

昔、アブラハムは自分が信頼している方の、お名前を知りませんでした。まさに自分が信頼しているお方であり、子のイサクも信頼し、孫のヤコブも信頼したお方でした。周囲の人々は様々な神々を信じていましたので、アブラハムも子も孫も、たくさん存在する「神々」のひとりとして、この気高いお方を信じていたのかもしれません。ただし明らかに神以上の神として、神々ではない神として信頼していたのです。このお方がモーセに自らを現わしてくださったとき、モーセはこのお方を何とお呼びすれば良いのか、何と言ってイスラエル人に紹介すればよいのか、わかりませんでした。それでこのお方に直接お尋ね申し上げると、このお方は「私は存在する」であるとお答えになりました。この答えは非常に形而上学的かつ哲学的であり、あまりにも意味が深すぎて、そのような思考に慣れていなかった当時の人々には、まさに謎そのものであったことでしょう。現代の我々にとっても、手に余るほどの深淵な意味が隠されていると言えます。

そこでこのお方が、ご自分のことをよく知ってもらうために、次になさったことがあります。ご自分が、エジプト人を始めとする周辺の民族が信じていた、様々な神々より力強いことを証明されたのです。出エジプト記の初めに記されている、様々な奇跡の目的はそこにあったのです。そして、それでも不充分だということで、次の手段として天地創造の物語を聞かせて、ご自分が天地の創造者であり、あらゆるものを超越した絶対者であると、自己紹介をしてくださったのです。天地創造の物語は、天地創造の経緯を記録したものではありません。神ではない神、神以上の神であられるお方の自己紹介なのです。当時の聖書の背景となった宗教文化は、現代の日本と大きく変わらず、たくさんの神々はあっても、絶対者の存在は人びとの意識の表には現れておらず、それを表現する言葉もなかったのです。

聖書が語る霊的存在者たちと日本の神々

旧約聖書に登場する人物たちも、新約聖書で活躍する人々も、みな、私たち日本人と基本的に同じ、「神々の世界」に住んでいました。彼らが戒めとして教えられたのは、そのような神々を迷信として捨て去り、唯一絶対の天地の創造者の存在だけを信じることではありません。そのような神々の存在は、信じていようがいまいが、どうでもよかったのです。大切なのは、天地を創造し、人間を造り、命を与え、生かしていて下さるお方を、自分たちが信頼する唯一のお方とすることでした。「神ならぬ神」だけを崇め敬い礼拝し、お仕えすることだったのです。

聖書の教えと物語の背景は、日本とよく似たアニミズムの世界でした。日本で言う「魑魅魍魎」の世界や神々の世界が、聖書が描き出している、天使や悪魔や悪霊や幽霊までが「ごちゃ混ぜ」になって、人間たちと同じ次元に、人間たちへの影響力を持って生存している世界なのです。一つ一つの名前や活動や性格は、異なった時代と場所と民族と原語の中なのですから、とうぜん違っていますが、大きな意味での感覚は同じです。そのような世界を否定するキリスト教は、唯物論や理神論に影響された、「近代キリスト教」と呼ばれる時代遅れのキリスト教、18 世紀から 19 世紀の自然科学に飲み込まれたキリスト教であり、聖書の教えに立つキリスト教ではありません。聖書が教えているのは、そのようなアニミズムの世界を認めながら、人間が崇拝し、礼拝し、賛美を捧げ、絶対に服従すべきお方は、創造主としてご自分を現してくださったお方だけだということです。

日本人が無意識のうちに感じている存在

聖書を通して人間に語り掛け、ご自分を天地創造の神として現してくださったお方は、人知を遥かに凌駕した超越者です。幸い聖書を読むことが出来た者は、聖書を通してある程度このお方について知ることが出来ます。しかし聖書を持たず、ユダヤ民族が体験したような神の自己顕現も体験していない日本人は、このお方のことを知りません。知らないながらも、日本人は三つの理由で、このお方のことを無意識のうちに、本能的感覚で知っているのです。その三つの理由は聖書に記されていますが、西欧の伝統的なキリスト教徒たちは、それに気付かず、気づいたとしても無視し続けてきました。ところがそれこそが、異邦人である日本人の宣教を考える上で、非常に大切なことなのです。

聖書に記されている大切なこと第一

伝統的な西欧キリスト教の言うことによると、すべての人間に共通なのは、「ことごとく罪に汚れ、このままでは永遠の滅びに陥ることになるから、神の救いを受けなければならない」という事実です。それはそれで間違いありません。でもそれよりももっと大切で、それに先行する共通事実があるのです。それは人間が、造り主であるお方に似せて造られたとい

う事実です。人間の本性、その根源的な性質は、創造者に似ているのです。その事実の中でも最も大切なのは、霊的な創造者に似せて、霊的な存在として造られていることです。

すべての動物の中で、人間だけが霊的な性質を持ち、霊的な命を与えられ、霊的感覚を与えられているのです。だからすべての人間は、民族や国家や文化や時代を超え、物質の世界だけにとどまらず、霊的な世界のことを想い、霊的な存在と力を前提とする、宗教的な感覚を備えているのです。宗教を持つことこそ、人間であることの証明です。進化論では宗教は未開の人間のものですが、すべての動物の中で、最も高度な存在である人間だけが宗教を持ち、進化の頂点に立つような先覚的な人間たちも、宗教を持つのです。宗教の本質は霊的超絶者を感じ、これとコミュニケーションを持つことです。人間は本来、創造主と交わりを持ち、そのお方の愛を感じながら、畏れと敬愛をもって礼拝すべきものとして、またそうするときにこそ、幸せを感じられるように造られているのです。

日本人が目に見えず、手で触れることが出来ない、気高く大きく強く愛と恵みに富むお方の存在を、たとえ霧の中で霞むような状態であっても、心の奥深くで感じるのは、このお方にそのように造られたからであり、人間としての本能だからです。ただ西欧のキリスト教が正しく指摘しているように、すべての人間は罪によって堕落し、創造者の下を離れ、その創造者に似せて造られたもともとの感覚も、歪められ、曲げられ、破壊され、本来の姿を損なってしまい、正しく機能しなくなっているのです。しかし、創造の時に創造者に与えられたこの人間としての資質は、完全に壊されてしまったのでも、失われてしまったのでもありません。不完全ながら、まだすべての人間が、この気高いお方を感じる能力を所持しているはずです。ただ、その感じ方、その能力には、文化や教育などの育った環境によって大きな差があります。日本人は特にその本能的な感覚に優れていると、考えられるのです。

聖書に記されている大切なこと第二

天地の創造者は、人間が罪を犯して堕落してしまった後にも、被造物を通して、すなわち自然物を通して、ご自分の永遠の栄光の性質、永遠の神性を人間に現わしてくださいました。それはローマ書の第一章に、パウロによって明らかに記されている通りです。ところが人間は、自然を通してご自分の栄光の性質を現してくださった、創造者の意に反して、こともあろうにその被造物、すなわち自然物を「神」として拝み、それらの形を刻んで偶像としてしまったのです。そのために天地の創造者は、人間をその愚かな欲求のままに捨て置かれたのです。その結果、偶像礼拝がはびこり、霊感を受けたパウロの記述によると、ホモやレスビアンがあふれ出しました。また、列挙されている 21 に及ぶ罪にも満ちるようになったのです。（ロマ書１章 18～３２を熟読してください。）

ところが日本人の宗教観は、パウロがここで述べたものとは少なからず異なっています。日本人の本来の宗教観では、偶像が存在しないのです。日本人が本能的に感じてきた、目に見えず体で触れることもできない、気高く聖く尊く大きく強く優しいお方は、人間の想像を超越し、言葉でも絵でも彫像でも表現することが出来ないお方なのです。ですから日本人の本来の高度な宗教観の表現では、偶像は存在しないのです。偶像が存在するのは、本来の高度な宗教感覚が少しばかり堕落してしまった場合と、仏教伝来の結果がもたらしたものです。日本人本来の崇高な宗教意識をパウロが知っていたとしたら、いったい何と言ったことか、「ればたら」ではありますが、想像してみるのも悪くありません。

先に述べたように、日本にはいろいろな民族が渡来し、混合してきました。その宗教心もまた、渡来人の影響のもとにあったはずですが、日本では独自の発展の仕方をしたらしいとしか言えません。素直な本能的感覚が重んじられたのです。それでいてアニミズムの感覚も無くなっていません。聖書の教えからしても、アニミズムの世界観は間違っていないのですから、それをなくす必要はありません。間違っているのは、アニミズムに表現されている、様々な霊を崇めたり礼拝したりして、偶像礼拝に陥ることです。さらにもっと大きな誤りは、アニミズムの世界観を否定することです。つまり天使だとか、悪霊だとか、魑魅魍魎の存在を否定する近代キリスト教こそ、人間が創造者に似せて霊的な存在として造られたという事実を否定する、大きな間違いを犯しているのです。

聖書に記されている大切なこと第三

三つ目の大切なことは、文字で書かれた律法を持っていない人でも、心に記された律法を持っているという事実です。パウロの言い方によると、律法を持っていない者が律法の要求を満たしているとするならば、その人自身が自分に対する律法なのであるということです。（ローマ 2:12～15）パウロは説明していませんが、これは創造者に似せて造られたという、人間の本性、根源的人間性と並べて理解されるべきものです。つまり、人間は人間である限り、生まれながらに創造主に似た性質を持っていて、その本源的な性質が、心に書かれた律法としての役割を果たしているのです。「原罪」、すなわち人間の罪の性質ばかりを強調してきた、西欧キリスト教が見落としてきたところです。人間はおしなべて創造者である神の性質を持っているために、愛し、慈しみ、憐み、公平を喜び、正義を高揚し、不正を憎み、偽りを嫌うのです。このような基本的な、あるいは原則的な倫理観もまた、人種や民族や国家を超えて、普遍的な人間性として存在しているのです。それは人間の本能なのです。

日本人の姿を観察していてすぐに思うことは、日本人はこの創造者に似せて造られた性質を、無意識ではありながら、素直に、より自然に、日常で表現しているということです。日本人は聖書を知りません。クリスチャンの生き方も、聖霊の力も知りません。しかし、そ

のようなことをすべて知っている、クリスチャン諸国の人々に勝るとも劣らない、高度な倫理性を備えています。もちろん、日本より高い倫理や高度な公徳心を持つ、キリスト教国家や民族もあることでしょう。それが当然のはずだからです。でもそのような国や民族は多くはないでしょう。

いま伝統的キリスト教国家や民族で、若者たちのキリスト教離れが急速に進んでいます。彼らの多くが、伝統的キリスト教に失望しているのです。自分たちが理想とする倫理や公徳心あるいは人類愛といった人間性は、伝統的キリスト教より優れていると感じています。伝統的キリスト教では、そのような物を養うことが出来ないと痛感しています。自分の内にある人間性の方が正しいと感じ、それを養い生かそうとしているのです。彼らは知らないかも知れませんが、その彼らの中にある人間性、すなわち、教会を否定しキリスト教を無視する人間性は、神に似せて造られたものなのです。心に刻まれた神の律法は、文字で書かれた律法に先行するのです。それのみか、その重要性においても普遍性においても、少なくても彼らにとっては、文字で書かれた律法を基礎にしたキリスト教よりも、優位に立つものなのです。

宣教者として大切にすべきこと

日本人に福音を伝えようとしている者にとって、大切なのは、創造者であるお方を明らかにしてあげることです。私たちはキリスト教という西欧の宗教を教えるのでも、西欧の神様を連れて来て紹介するのでもありません。ましてや、日本人が心の奥深くで本能的に感じている宗教感覚を否定し、キリスト教的宗教観を受け入れるように勧めることでもありません。むしろ、多くの日本人が昔から心の奥で感じ、良くは分からないままに大切にしてきた本能的な感覚である、一神教的な感覚、超絶者を認める感覚を大切にしてあげるべきです。

ヨーロッパで造られた美味しいスープをお勧めするために、みそ汁を捨ててしまうのではなく、神に似せて造られたという同じ原料を用いて、日本人に合う、より美味しいみそ汁を一緒に作ることです。もしも日本人に、気高く大きく優しいお方の感覚が薄く、ほとんど自覚がないとするならば、その自覚を促し、引き出すようなお話をしてあげればいいのです。日本人が神でない神、神以上の神として、幼い時から抱いてきた畏れと敬愛の情を、わずかでも持っているならば、それを正しいものと認めて、その神ではない神、神以上の神についてお話すれば良いのです。宣教師たちのスーツケースに入れられて、外国から持ち込まれた神を信じるように勧めるのではなく、太古から今に至るまで、日本におられ、日本を祝し守ってきてくださったお方を、もっと明確に認めて、感謝を捧げることを教え、さらに、このお方のお喜びになる生き方をお教えすることです。このお方がお喜びになる生き方とは、このお方が愛してやまない人間を、心から愛し大切にすることです。

Ⅱ.　日本人の崇高な宗教感覚と神道

日本人本来の宗教感覚は、非常に崇高です。多くの日本人が、創造者に似せて造られた性質を、宗教的本能としてより良く保っていると思えます。その理由は、よくわかりません。そのようなことを研究した文献も知りません。それで、筆者自身の考察を記す以外に方法がないのです。筆者はこれまで多くの日本人と接触し、その宗教意識について語り合ってきましたが、たとえ「神は存在しない」と言い切った人たちでも、気高く聖く大きく優しいお方の存在を、薄々ながらも感じていたのは驚きです。

偶像の不在

筆者自身は、折に触れて、そこここでしばしば語ってきたことですが、日本人の内にある崇高な宗教感覚では、一切の偶像を否定し排除する事実に、心を留める必要があります。「言葉による偶像」である神についての論説も、絵画による偶像である宗教絵も、彫刻や彫塑による偶像である像も、一切認めず、これを作らず、設置しないのです。大社や神社のもっとも奥深いところに入っても、そこに偶像は無いのです。時には米粒が置かれていたり、鏡がおかれていたりするということですが、それは偶像、すなわち礼拝される対象物ではなく、代（しろ＝代理)、すなわち何らかの意味で、気高い存在者を暗示するものなのです。それに似た者は旧約聖書にもあります。モーセが山の中で観た燃える芝は神ではありませんが、神の臨在を示す「代」の役割を果たしていました。

目に見えず手でも触れることが出来ない超越者に対する、このような感覚を持っている日本人は、ローマ書一章で言われている神の「懲罰」をあまり受けていない、稀有な民族だと考えられるのです。かつてアフリカで、宣教師として活動してきたという、日本人牧師とお話ししたことがあります。彼によると、アフリカの多くの民族にも、偶像は存在していなかったけれども、目に見えない超絶的な存在を心に感じていたと、聞いたことがあります。アフリカの人たちは、その祝いや祭りが宣教師たちに誤解され、偶像礼拝の濡れ衣を着せられているということでした。筆者自身が宣教師として働いていたフィリピンの未開部族にも、至高の存在者の感覚がありました。しかし、その存在者の偶像というものはありませんでした。あまりにも気高くて、罪ある人間の礼拝さえ受け入れられないということで、その存在者を対象とした宗教行事は、一切ありませんでした。手掛かりは細く、弱く、不確かですが、そのような至高の存在者の感覚を接点として大切に取り扱い、福音を語るべきではなかったかと、深く反省させられています。当時の筆者には、それは、未開部族の曖昧な宗教心に過ぎず、偶像礼拝に等しい穢れたもので、話題にするのも嫌だったのです。

高潔な宗教心と倫理

日本人の倫理的高さ、高潔さはしばしば話題になります。かなり輪をかけた話だったり、尾ひれのついた物語だったり、まったくの作り話だったりすることもありますが、その多くは多分事実か、事実に近いものでしょう。その背後には、いろいろな理由が挙げられています。そしてそれらの多くも、的を射ていることでしょう。でも、日本人の宗教的感覚が理由として挙げられているのは、聞いたことがありません。日本人には、「昔から誰かがご覧になっている」「どなたかが知ってくださっている」という感覚を持つ人が多いのです。「お天道さま」（おてんとう様と同じ）という言葉があり、太陽を神格化した言葉であると言われていますが、多分それは単純に、超絶者に近い良く分からない存在への愛称でしょう。その超絶した存在に見られている、知られている、理解されているという感覚が、日本人の高潔さに通じているのでしょう。

闇米に手を出さずに飢え死にした判事の話

また日本人の多くには、人間的な高潔さを見ることができます。古い話ですが、戦後の食糧難で国民全体が腹を空かせていたとき、「絶対にヤミ米には手を出さない」と、闇物資を取り締まる判事としての信念を貫き通し、餓死した山口良忠という方がおりました。（ちなみに彼は神官の息子でした）その話に、闇物資で暮らしていたみんなが、「馬鹿な奴だ」と笑いました。しかし同時に、だれもが、そのような高潔さに心を打たれ、そのような日本人がいてくれたことに、密かに感謝したものです。自分にはそこまでの志を実践することはできないけれど、自分に代わってやってくれた人がいたと感じ、同じ日本人であることに感動したものです。そのような精神、あるいは倫理は、誰かに見られているとか知られているとかいう問題ではなく、自分の内側から湧き起こってくる、自分らしい生き方です。正しかったか間違っていたかということさえ超えた、本能的倫理観です。それはまったくの「聖」であられる創造者に似せて造られた、人間の根源的本性のあらわれです。

氷点の主人公陽子の倫理観

1964 年 12 月から、およそ一年間にわたって朝日新聞に連載された、「氷点」という小説は当時随分話題になり、多くの人に読まれたものです。もともと素人だった三浦綾子という熱心なクリスチャン女性が、原罪について描きたいと朝日新聞の懸賞小説に応募し、見事一等に取り上げられて連載に至ったものです。クリスチャンが絶対的に少ない日本で、キリスト教とはほとんど関りのない物語を通して原罪を描き出すなど、おおよそ無理と思えることを試みて、「成功」した点に「たいしたものだ」と思わずにはおれません。小説の粗筋を簡単に言うと、主人公の陽子が、継母からのいわれのない虐待を耐え続けながらも、高校卒

業を間近に控えてついに自殺に追い込まれてしまいます。吹雪でガラス戸がカタカタと鳴る中、死の床に臥す陽子の顔に、生き延びる一縷の望みが現れたところで、小説はやや唐突に幕を閉じるのです。55 年も前に読んだものですから、記憶はかなりあいまいになっていますが・・・・。

ここに登場した主人公陽子は継母の陰鬱ないじめを受けながら、自分は絶対に正しいのだ、石にかじりついても、正しく生きるのだと決意して、仕打ちに耐え続けるのです。ところがある時、自分は継母の実の娘を殺した犯人の、娘なのだということを知って、（実際は誤った情報でしたが・・・）絶対に正しく生きようと思い続けた、自分の内に流れている罪の性に気付いて深く傷つき、それに耐え切れずに自殺を図るのです。

読者は主人公の中に描かれた、正しく生きようという崇高な願い、その倫理観に心を打たれるのです。誰が見ているからでもなく、誰に知られているからでもなく、ただ正しく生きたいという心の奥底からの願いに、静かに共感したのです。日本人の多くが理想としながら、自分には不可能であると諦め、あえてばかばかしいと笑い捨ててまでも、そのような高尚な意識から離れようとするのです。それでも完全には離れられないために、この陽子の生き方に震えて涙を流したのです。そして涙を流せる自分に納得して、「日本人であって良かったな」と安堵したのです。

それが膨張して「氷点続編」への期待が高まり、とうとう数年後に続編が出されたほどです。ちなみに、主人公の陽子は、この時はまだキリスト教との接触をしていませんでした。（続編ではキリスト教が顔を出し、いささか月並みになったようで、個人的には・・がっかり・・・というところですが。）

もちろん、日本人だけが高い倫理を持っていると主張するのでも、他のすべての国々に比べてどうだと言うほどの、知識を持っているわけでもありません。ただ、いわゆるキリスト教文化を長い間保持してきた国々と比べても、決して引けを取らないとだけは言えるでしょう。彼らは書かれた律法（聖書）を持ち、教会を持ち、説教をきき、長い間キリスト教的愛と倫理に育てられて来たにもかかわらず、あの程度なのです。一方日本は、聖書も持たず、教会も極端に少なく、キリスト教の神には敵対意識さえ抱いている人たちが多くても、これだけの倫理観を持っているのです。

神に似せて造られた人間の本性と良心

使徒パウロは、人間そのものに記されている文字によらない律法について語ったとき、良心についてもわずかながら触れています。でも、それ以上話を進めていません。いくらか関

連のある記述は、ピリピ書四章八節で「すべての真実なこと」について、語られているところだけのように思います。ですから決して聖書的な考察とは言えないのですが、筆者の理解では、神の姿に似せて造られた人間の本性が、人間性の最も深いところにあり、たとえ強弱や鮮明度に差があるとしても、それが、全人類に普遍的な文字で書かれていない律法です。

一方良心とは、人間の中にある神に似た性質が、与えられた文化、教育、宗教などの環境の中で、具体的に現れきたもの、芽吹いてきたものと考えています。それは文化や教育や宗教などの後天的な要因によって、随分と異なったものになります。イスラム教の中の良心は、仏教の中の良心と異なります。共産主義の中の良心と、自由主義経済の中の良心は違います。騎馬民族の良心と稲作民族の良心とは異なっています。すべての人の良心は、すべての人の育った環境が異なっているように、異なっています。

日本人は、よくも悪くも日本の文化で育ち、日本人の良心を持つに至りました。日本人独特の宗教意識と、共同体感覚の強い環境で育てられたために、日本人独特とも言える良心になったのです。しかし同じ日本人であっても、育ち方は千差万別です。良心もそれぞれ異なっています。とはいえ世界的な視野で見ると、日本人としての特質が色濃く出ているのです。もしも伝道において何が善で何が悪か、何を悔い改めなければならないかという問題に触れる時は、良心を持ち出すだけでは不十分です。また、アメリカ人の良心で日本人が裁かれてはならず、日本人の良心でアメリカ人を糾弾してもならないのです。良心からもう一段深く掘り下げた、人間性に話が及ばなければなりません。人間は神の姿に似せて造られているというのが基本です。

日本人に気付いてもらう

日本人に福音を伝えようとする者は、このような日本人とそのような日本人を作り上げて来た社会と、その背後にある宗教意識を良く理解すべきです。多くの日本人に、自分たちの直感的神意識が、西欧キリスト教信徒たちに勝るとも劣らない、高度な倫理的社会を築き上げている事実に、気づいてもらうべきです。そして、日本人が昔から感じ続け、崇め続けて来た、目に見えず手で触れることもできない高貴なお方こそが、私たちクリスチャンが信じている、天地の創造者であるとお話しして上げましょう。使徒パウロは偶像に満ちたアテネで、「あなた方が知らないで拝んでいるお方についてお話ししましょう」と語り始めたように、僅かでも残っている正しい宗教観を利用して、正しい神知識へと導いてあげましょう。少なくても日本の「知られていない神」は、パウロが取り上げたアテネの「知られていない神より、よほど気高い存在だったことは明白です。

第二の堕落・偶像礼拝とその罰

ローマ書の一章に残されたパウロの記述から推測すると、日本人は、人類の「第二の堕落」とも言うべき偶像礼拝を避けてきたために、極度の道徳的腐敗に陥らず、高度な倫理的社会を形成して来たと考えることが出来ます。ここ 2 千年の歴史を垣間見るだけで、いわゆるキリスト教国が犯してきた残虐性は、あまりにも醜いものです。宗教改革の後、聖書の教えを強調するプロテスタント諸国が、力を得るようになってからでさえ、その残虐性は少しも衰えていません。聖書の素晴らしい教えに反し、キリストの美しい模範に背いて、キリスト教こそ、世界の歴史上、最も人道に反したこと、すなわち神に似せて造られた人間性に、叛いたことをやり続けた宗教です。

天地の創造者が人にお与えくださった、神の美しい性質に、真っ向から反することを行い続けたのは、キリスト教国を自認し、キリスト教文化を誇った人々です。筆者個人としては、徳川時代のカトリックが殲滅されたことを喜ぶ者です。当時の二大カトリック国が世界中で行っていた、極悪非道さを学んでそう断言するのです。明治維新において、日本がプロテスタント国の殖民地にならなかったことを喜ぶ者です。第二次世界大戦においてすら、「人類に対する罪」という偽の大義名分で日本を裁いた、アメリカやイギリスやオランダをはじめとする連合国のような、残虐非道なことをせずに済んだからです。

第二次世界大戦のさなか、日本軍がどれほど残虐非道なことを行ったか、戦後アメリカの監視のもとに教育を受けた筆者たちは、アメリカの情報操作によって騙され続けてきました。アメリカは、日本が再び戦争を始めることが出来ないように、日本人としての誇りを持てなくするために、日本人の心に戦争に対する罪悪感を植え付けようと、徹底した情報作戦を展開したのです。宣戦布告を行わなかった卑怯な真珠湾攻撃、何万ものアメリカとフィリピンの将兵を死に追いやり、人間性を無視したバターンの死の行進、さらには三十万人に及ぶ南京の虐殺、あるいは二十万に及ぶ朝鮮人慰安婦などと言う数々の作り話を、信じ込むメンタリティーを植え込まれ、日本人は日本人であることを恥じるように教育されたのです。

戦後日本を実質的に統治した戦勝国アメリカが、意図的に作り上げた「戦争犯罪者国家日本」のイメージを払拭して、日本人の美しさを正当に認め、その宗教観を高く評価して上げるべきです。戦争で負けた日本人は、多くの罪を犯したのは事実です。でもその日本人を一方的に裁いた戦勝国の人々は、日本人以上に醜い罪を犯しています。これらのことは、はアメリカ政府が 65 年を経て開示した、太平洋戦争に関わる「スーパーシークレットインフォーメーション」という膨大な資料の調査が進むにしたがって、明白になって行くことでしょう。

天地万物の創造者に似せて造られた、本源的人間性を現している日本人

すでに述べたように、日本人が絶対に正しいとも、罪を犯したこともないなどと言おうとしているのではありません。でもそれは多くの民族や国家に比べて、またキリスト教をも含めた多くの宗教の信奉者たちに比べて、決して多くはなかったし、かえって少なかった。また、今も少ないという事実を指摘しているのです。そしてその理由を、聖書の記述から見て、日本人の宗教心の中心にある、唯一の超越者に対する畏れと、そのお方に似せて造られた人間性の本質を、素直に現していく日本人の精神性、あるいは倫理性だと思うのです。これは日本人自身にさえ自覚されていない事柄であり、日本人クリスチャンさえ気づかずにいることです。

ちなみに、ポルトガル語を話すカトリック国ブラジルで、2017 年だけで殺人事件の被害者となった者は、74000 人近くにのぼります。スペインの殖民地になったカトリック国フィリピンで、ラモス大統領が選ばれたとき（1992 年)、テレビのニュースでは「今回の大統領選挙は非常に平和裏に行われ、わずか 72 人が殺されただけです」と語られていました。筆者自らが聞いたニュースです。プロテスタントがかなりの比率を占めていたドイツが、600 万人のユダヤ人を虐殺したことは、誰でも知っています。

プロテスタントの雄オランダが、インドネシアを植民地とし、残虐非道の限りを尽くしたこと、それを日本軍が解放したことはあまり知られていません。ましてや日本が敗戦したとき、オランダは失った植民地を取り戻そうと、再びインドネシアに攻め入ったことについて、知っている人はほとんどいません。それに対し、敗残兵であった 1000 人近い日本人が、現地人を組織し武器を提供してオランダと戦い、ついにオランダを退けてインドネシアの独立を助けた事実など、よほど歴史に興味のある人でなければ知らないことです。

同じようなことはマレーシアでも起こりました。マレーシアを植民地としていたのは、もう一つのプロテスタントの雄イギリスです。イギリスは世界の四分の一を植民地とし、非道の限りを尽くしました。その後遺症が、いまだに中東やアフリカの国々の、殺し合いや貧困となって現存しています。そのような事実を、かつての宗主国が謝罪したという話は、聞いたことがありません。

聖書の記述から判断すると、日本人の精神性、高度な倫理性は、日本人が偶像礼拝を避け、これを排除してきたためだと考えられます。たとえローマ書一章に記されているような、神の厳しい刑罰の対象となったとしても、日本に住んでいた民族は、かなり軽い刑罰で済まされたのではないかと思わずにはおれません。一方聖書を知り、神を信じていると言われる多くの西欧諸国も、様々な偶像礼拝に陥っていたのです。中でも最も悪質なのは、富という神（マモン）を崇め追求する、偶像礼拝でした。この偶像礼拝のために、神をも教会をも利用

したのです。このような偶像キリスト教は、アメリカをはじめとする現在のキリスト教の中で跋扈しています。日本でも、やれ教会成長だ、やれ繁栄の福音だと姦しい限りです。

人種差別

聖書にも、人種の違いについての記述は、いく度か残されています。ところが、人種差別に相当するような、記述や教えは出てきません。かえって、まったく差別意識を持っていなかったと思わせる記述がいくつかあります。ユダヤ人の選民思想が間違ったものであると、くり返し述べられているように、差別意識を認めるような表現はまったく出てこないのです。

ところがキリスト教の歴史は、まさに差別の歴史でした。15 世紀から始まり 20 世紀まで続いた、欧米白人キリスト教国による近代植民地主義は、全世界を蹂躙し尽くしました。欧米キリスト教国家の殖民地とならずに済んだのは、日本とタイだけです。（アフリカのリベリアは、アメリカが解放奴隷のために造り上げた国家ですから例外） 肌の色の違いによる人種差別だけを取り上げても、まったくひどいものです。アメリカでは早くから人権問題が取り上げられ、独立宣言の中でも人間の平等が高々と謳い上げられています。しかしこれは、白人の間だけのことで、有色人種は含まれていなかったのです。先住民であったアメリカ・インディアンは殲滅され、アフリカから誘拐略奪されて来た黒人たちとその子孫は、数世紀をまたいだ長い期間奴隷として、文字通り、牛馬と等しく働かせられ虐待され続けたのです。当然人権などは認められませんでした。またアメリカと同じようにイギリスも、その他のキリスト教国も、黒人奴隷を当然のように認めていました。

このような人種差別は、黒人やアメリカ・インディアンだけではなく、有色人種一般に対するものでした。当然日本人も差別の対象ではありましたが、日本はその国力から幾分和らいだ差別に甘んじていたというところです。とはいえ、カトリック国であったポルトガルやスペインが、日本と交渉を持っていた当時、有色人種として他国で売買され奴隷化されていた、日本人男女が少なからずいたということも、知っておくべきでしょう。1919 年になって、ある程度国際的な力をつけてきた日本は、パリ講和会議において、人種差別撤廃条約を提案するまでに至りました。カナダでの日本人差別が発端となったと思われますが、これが世界最初の人種差別撤廃ののろしでした。

この提案は１１対５で賛成が多かったにもかかわらず、人種差別をなくしては自国がなりゆかないと判断した、議長のアメリカ大統領によって廃案とされてしまいました。これが、大東亜戦争の「善意の部分」へとつながっていったのです。日本が起こした大東亜戦争は、アジアへの侵略と捉えられがちですが、西欧キリスト教国に植民地とされ、過酷な条件で生

きざるを得なかったアジアの人々を開放し、人間としての権利を取り戻させるという意味もあったのです。(「大東亜会議」について、調べてみてください) 日本は結局敗戦により、その夢を果たすことはできませんでしたが、戦後、アジアの国々が次々と独立を果たして行った背後には、日本の果たした役割が大きかったのも、否定できない事実です。

日本に人種差別がまったくなかったと言えば、真っ赤な嘘になります。鬼ヶ島で退治された赤鬼青鬼は、日本近海で難破したヨーロッパ船の生き残りが、日本人に殺された悲しい出来事だった可能性も否定しません。そんなこともあったかもしれません。しかし信長がアフリカから連れてこられた黒人奴隷を買い取って、差別もなしに寵愛したというのも事実の様です。欧米キリスト教国のような露骨な人種差別は、少なくても国家の政策としては行われたことがありません。「日本も朝鮮と台湾を植民地にしたではないか」という意見もあります。ただ、日本は朝鮮と台湾を植民地にしたというのは、正しい認識ではありません。朝鮮も台湾も日本に併合され、朝鮮人も台湾人も、日本国民と認められ、少なくても法の上では日本国民としての権利を、大概平等に認められたのです。このようなことは他に例を観ません。フランスがやりかけて、途中でやめてしまったことは知られています。

ただし個人レベル、あるいは民間レベルでは、日本人のアジア諸国の人々に対する差別は、かなりあったと言わざるを得ません。関東大震災の時に起きた朝鮮人の虐殺は、朝鮮人を差別していた日本人が、災害に乗じた朝鮮人の逆襲を恐れて、やってしまったものだと思われています。日本人同士の間でも、出身地や出自に関する差別はたくさんありました。今でもあります。しかし、それも多くの民族や国家と比べると、まさに最小限にとどまっています。くり返しますが日本人は文字で書かれた律法、すなわち聖書を知りませんでしたが、創造者に似せて造られた性質という文字によらない律法、人を人と認めて大切にするという性質を、より良く持ち続けていたのです。

人種差別と奴隷制度について

日本の歴史にも、人身売買もあり、実質的に他人の所有とされる「奴隷の身分」の人たちも、少なくありませんでした。近隣部族との争いで負けた者や、借金で自らを売り渡さなければならなくなった者、またはその子孫など、理由はさまざまですが、類似の身分は旧約聖書の時代のイスラエルにもありましたし、多くの古代国家にありました。ギリシヤやローマ帝国では、一般市民より奴隷の数が多かったことさえありました。

しかし人種差別が露骨な形で現れた、非人道的奴隷の売買は、オスマン帝国がアフリカ大陸から大量の黒人を拉致して、売りさばいたのが始まりと考えられています。それを力によって征服したキリスト教国が、うまい儲け話として取り入れたのです。特に、15 世紀に至

って、カトリックの法王が、ポルトガルの世界征服を許可し、それに伴う奴隷売買をも祝福したため、キリスト教国の奴隷売買が一気に広まりました。この植民地主義と一つになった奴隷売買と、奴隷制度の確立は、その後力を持つようになったプロテスタント諸国でも、ますます強固なものとなっていきました。彼らはおもに現在の象牙海岸地方で、拉致、誘拐の暴虐の限りを尽くして黒人を拘束し、世界各地の人手を要している国々に、商品として売り渡したものです。

筆者はもともと、そのようにしてアメリカに送られ牛馬のように働かされ、売り買いされ、人権などと言うものをほとんど認められていなかった黒人奴隷たちが、苦しみの中で歌い繋いできた黒人霊歌が好きでした。日本に帰国してから知った、「Lord, How Come me Here？ 」という歌を、あらゆる種類の歌の中でも、最も悲しい歌だと感じています。タイムス紙によって 20 世紀最大の歌として選ばれた「Strange Fruit」という歌は、黒人霊歌ではありませんが、黒人奴隷の悲惨さを歌った歌として、忘れることが出来ません。（どちらもユーチューブで鑑賞出来ますので、是非どうぞ） 民主主義、平等、人権が標語のような国家アメリカで、公民権が認められたのは 1964 年のことであり、筆者が聖書学校で学んでいたつい先ごろの出来事です。「I have a dream」という、マルチン・ルター・キング牧師の演説を、彼が暗殺された後に、感動しながら聞いたものです。

筆者が言いたいのは、日本には人種差別がなかったとか、奴隷制度がなかったということではありません。実質的には日本にもあったのです。筆者が言いたいのは、人種差別を根にした黒人奴隷制度が、キリスト教国によって世界中に広められ、強化され、何世紀にもわたって繰り返されていたという事実なのです。そしてそのような差別は、今でもアメリカで見ることが出来ます。日本に無教会主義と呼ばれるクリスチャンたちが存在するのも、創立者であった内村鑑三が、アメリカの教会で人種差別に遭遇して、まともな取り扱いを受けなかったという出来事が背後にあります。

高潔な神道的感覚と堕落した神道

日本人の宗教意識には、非常に気高い部分と低俗な部分が混在していて、整理されないままになっています。非常に気高い部分は、創造者であるお方に似せて造られた性質が、素直に表現されているところです。すなわち、彼らが、非常にぼんやりとではあっても、本当に崇めるべきお方と感じているのは、目に見えず、体で触れることが出来ないお方、人間の思考と感覚を超越しているために、文字でも絵でも像でも表現できないお方として、偶像を一切排除しているところです。一方、その感覚が半歩でも後退すると、神道と言う宗教になり、様々な民間信仰や俗信につながっていきます。日本人の気高い宗教意識は神道に直結しながら、厳しく見ると、神道は気高い日本人の宗教意識の、残念な堕落の姿であると考えるべ

きです。

日本人の神意識と依代（よりしろ）

日本人の至高な存在に対する貴い感覚も、あまりにも薄く不確かなのであるために、日本人の多くは、何とかしてこの薄い感覚を目で見えるもので表現し、少なくても形のあるもので、感じられるものにしたいと願いました。それが「依代」というものを産み出したのです。これは薄れた至高のお方に対する感覚を助けるものでありながら、偶像とされる一歩手前で踏みとどまっている姿です。依代は自然物でもなり得ますし、人造物でもなり得ます。そのものを通して、目に見えないお方を実感し、その臨在を強く感じるための手助けとなるものです。

例えば日本人は太陽を拝むと言われています。でも、本当に太陽を神と信じてそれを礼拝している日本人は、果たしてどれだけいるでしょう。「神」の定義にもよりますが、太陽に人格を感じ感謝を捧げ礼拝をする日本人は、まずいなと思われます。太陽に向かって手を合わせてはいても、日本人は太陽を礼拝しているのではなく、太陽の背後におられ、すべてのものに命を与えている太陽に象徴される、目に見えないお方を想定して、太陽に向かって手を合わせるのです。深山に入ると、うっそうたる森林の中でもひときわ高く太く年老いた木には、しめ縄が張られているのをよく見ます。すると、多くの人が、その木に向かって手を合わせます。同じように海岸では、荒波に削られた奇岩にしめ縄が張られています。それを見る人たちの中には、思わず手を合わせる者が現れます。苔むす谷あいの小径には、小さな祠が置かれていて、通りすがりの人が手を合わせます。

大木も奇岩も祠も神ではありません。むしろ、神がいらっしゃると感じさせる木を記念とし、奇岩を記念としているのです。また、祠を建てて神の臨在を感じたことを表現し、その場所を大切にしているのです。日本人の多くは、そのような依代を礼拝の対象とはしていませんが、そこに至高で見えないお方の存在を感じているのです。西欧の宣教師たちやそれに影響を受けた日本人クリスチャンが、たちまち「偶像」と断定して非難してしまうものです。

聖書の中に見られる依代

このような依代が、日本人以外の人々の中にも見られるものか、まだよく調べてはいません。しかし、少なくても聖書の中にはいくつも見られるものです。神の臨在と御業を記念するものとして、神様はノアの洪水の後に虹を置いて、これを見るたびに思い出しなさいとおっしゃいました。ヤコブは神と相撲を取った後に石を置いて記念としました。イスラエルの民はヨルダンを渡ったときに、そこに 12 の石のモニュメントを築きました。これらはまだ

依代とは言えませんが、その要素は含まれています。また、モーセや七十人の長老たちが神の姿を仰ぎ見たという記述も、本来有限の人間の目では見ることが出来ない無限の神ご自身が、人間のその有限さを思いやり、何らかの形で、あるいは形なき形で、ご自分の栄光の姿を人間の目で確認できるように、取り図らってくださったものだと考えられます。もちろん、モーセも長老たちも栄光の神の全体像を観たのではありません。イザヤが見た「王座に座しておられる主」も、主の全体像ではあり得ません。穢れた人間の有限の目でも確認できるように、主が特別に低い次元の姿で現れて下さったのです。これらの出来事には、偶像化される一歩手前の危うさを感じますが、依代によらない神の現れとして、稀有なものです。

荒野で挙げられた蛇は拝むものではありませんでしたが、それを見上げる行為を、天地創造の神への信仰の象徴として受け取られました。契約の箱は拝むべき対象ではありませんでしたが、神の臨在の象徴として丁重に扱われなければなりませんでした。牛車から滑り落ちそうになった箱を、思わず支えようとしたウザは、その場で神に打たれて死んでしまいました。聖い神の臨在の象徴だったからです。どんなに善意であっても、普通の人が決して手を出してはならないものでした。契約の箱にまつわる話は他にもいくつもありますが、至聖なるお方の臨在の象徴であり、それを見る人はまさに神の臨在を感じ、畏れに包まれ、喜びに踊ったのです。箱の中の三つのもの、アロンの杖とマナの入ったツボと十戒の石板も、神の助けと臨在の象徴でした。天幕も聖所も至聖所も、神の臨在の象徴でした。後代には、神の御意思ではありませんでしたが、神殿が建設されました。これも神の臨在の象徴で、これが建てられたときは、臨在の顕現である雲が聖所に満ちたのです。しかし、これも礼拝の対象ではなく、神の住まいでさえもなかったのです。建てたソロモン王自らがそう語っています。

新約聖書でもこの依代の感覚は生かされています。キリストご自身が制定なさった聖餐式のパンと葡萄酒は、決してキリストの体でも血でもなく、礼拝されるべきものではありませんが、たんにキリストの体と血を思い出すべき、モニュメントで終わるものでもありません。むしろ、そこに実在のキリストの臨在を感じるべき、依代としての性格を強く持つものだと理解するのです。

大切なのは、偶像を忌み嫌って厳しく禁じられたお方が、依代を許しただけでなく、それをご自分の側からお定めになっている点です。神はご自分の見えない性質、触れることが出来ない性質が、肉体を持ち、見ることによってまた触れることによって、初めて存在を実感できる人間の弱さと限界に、思いやりをもって妥協してくださっているのです。

依代としての神社

日本中いたるところに見られる神社も、大木や奇岩と同じように、依代としての役割を果たしています。それがどれほど見事な大社であろうと、山間にひっそりと建つ小さな神社であろうと、日本人はそこに至高のお方が住んでおられるとは信じていません。ただ、そのようなお方がいらっしゃるということを、その神社が語っているだけです。ソロモンが建て、後のイスラエル国家の象徴ともなった神殿も、同じです。普遍的存在として「すべてのものを超越し、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられ、すべてのものをご自分の内に収めておられる」お方が、人間が作った建物にお住まいになるわけがないのですが、そのお方の存在を象徴的に現し、そのお方を褒め、讃え、礼拝すべき場所として、「聖別」し、そのお方の臨在を強く感じることはできるわけです。もともと、至高のお方は自然物の中に住んでおられると感じて来た日本人は、神社を建てた後、その周辺を木々で覆い、大木になるまで大切に育てる習慣を保ってきたことにも頷けます。

日本人の神意識の廃頽

日本人の神意識が、偶像を否定し、絵も像も拒絶している事実は立派です。依代や記念碑なども、聖書の記述にも見られるように、神の許容の範囲であったように思えます。ところが、神の姿をどうしても具体的に理解したいという人間の愚かな欲求が、間違いを引き起こしました。ミケランジェロが描いた創造神の絵は有名です。猛々しい初老の男の姿で表現された神が、まだ命を持っていなかったアダムの弱々しく差し出された指に触れ、まさに命を吹き込もうとする一瞬を描いたものです。絵画を鑑賞する目を持たない筆者には、芸術としてどうのこうのと言えませんが、宗教的な意味合いで鑑賞すると、まさに馬鹿々々しいにも程があるというか、抱腹絶倒というべきか、キリスト教芸術が聞いてあきれるところで、聖書の教えがまったく無視されている証拠です。天地創造の神は、目に見えず、体で触れることもできないお方であることは、聖書がくり返して教えています。このお方のことを、有限で地を這い回る虫けらのような存在の人間が、説明しようと試みた瞬間から、日本人の宗教心にも廃頽が始まりました。たぶんそのような試みは、有史以前、つまり、文字が用いられる以前からあったことでしょう。しかしそれが明らかになったのは文字が輸入されたことによるもので、古事記と日本書紀の二つの書物に明白です。

仏教の伝来と日本人の高度な宗教意識の廃頽

素朴な宗教心で、良くは分からないまま、至高のお方を感じて礼拝をし、祭りを行い、原始的な生活を送っていた日本人は、仏教の伝来によって驚愕させられました。宗教的には、拝む対象をもたず、極めてあいまいなまま目に見えない存在を礼拝していた人々は、燦然と輝く仏像を見て、肝をつぶしたことでしょう。さらに、教えというほどのものを持たないまま、素朴な祭儀を行ってきた人々は、仏教の高度に発達した教義と哲学的な教えに、心を奪

われてしまったことでしょう。

仏教の伝来は、まさに文明開化でもあったのですが、宗教的には廃頽の大きな一歩でした。多くの人々が、より優れた文明として、仏教と中国や朝鮮半島の知的技術的財産を取り入れたのです。また神道は、基本的に死というものを汚れと理解し、忌み嫌って粗末に取り扱う傾向でしたが、仏教はその神道の「隙間」に上手く入り込み、弔いの行事を盛んにすることによって、家族親族、そして先祖までも加える、血族による縦横の人間関係を強調することが出来ました。それまでは居住集落の人間関係が、日本人の帰属意識（アイデンティフィケーション）の中心だったところに、血族関係による帰属意識をも強めることによって、仏教はさらに強固な基盤を築くことが出来たのです。

神道と仏教はあまり争い事を起こすことなく、共存することが出来ました。もちろん、曽我と物部の争いにも見られるような小競り合いはありましたが、仏教は神道に欠けた領域を埋めるものだったからです。とはいえ、神道に熱心な人々にとっては、仏教は脅威であったに違いありません。特に仏教の発展した教義と哲学を知るにつけて、神道にはそれがないことに危機感を抱いたに違いありません。それで、日本人の高度な宗教意識で一切の偶像を避けて来たにもかかわらず、ここに至って、その宗教意識とその宗教による日本国の由来を語る必要性が出てきたのです。そのために、日本人の高度な宗教意識は堕落して、ギリシヤ神話にも負けず劣らずの、低級な神話が創造されてしまい、それ以来、この神話が日本の神道の基礎と考えられるようになったのです。つまり筆者の見解によりますと、神道は日本人の高度な宗教意識を引き継いでいながら、実はそれを廃頽させたものであるということです。

日本人の宗教意識のさらなる廃頽

現在の日本人の 80 パーセントは仏教徒であり、80 パーセントが神道に所属するそうです。計算が合いませんが、これが現在の日本人の曖昧な宗教意識によるものです。多くの日本人には仏教と神道との違いが分かりません。自分はどちらの宗教に属しているのかも、はっきりとはしません。どうしてそのようなことになったのでしょう。それは、仏教が神道の欠けたところを補う形で存在し、神道も、強い反発をしないでこれを受け入れて来たからです。日本人は、とても実利的な一面をもっていて、なんでも自分たちの生活に役に立つものはいいものなのです。神道は日本人の大らかな宗教心を、廃頽したとはいえ持ち続け、日本人という帰属意識を保たせます。仏教は教義的にも哲学的にも発達し、神道にはない死を取り扱う行事にたけ、血族関係を高揚します。それだけでなく、日本人固有の侘び寂の感覚までも、仏教のものとして理解させるほどに、日本人の心に入り込んでいます。神道も仏教も日本人の実利にかなっているのです。これは高度な日本人の宗教意識が、実利主義的感覚に

敗北したことであり、廃頽の一歩です。

神仏習合

とは言え、神道と仏教の争いは避けられないものでもありました。ところが日本人の実利主義は、宗教の争いに益を見出すことが出来ませんでした。争う代わりにむしろ合同してもらうことを望んだのです。ここに神道と仏教の混合、いわゆる神仏習合が起こります。日本古来の神々は、仏教の諸仏であるという言い方です。仏教側からすると本地垂迹（ほんちすいじゃく）です。つまり、人民の理解度が高い西方の国では、仏として現れてくださった方々が、まだ人々の理解度が低い日本では、仏を理解するのは無理だろうから、神々として現れて下さったという理屈になったのです。神道側の人たちがこれで完全に納得したわけではありませんし、仏教側の人々がこれで充分と考えたわけでもなさそうですが、これで一応激しい争いは避けることが出来、神仏習合という神道と仏教の混合が行われたのです。さらにここに中国の天道思想（太陽の動きには一定の規律があることから天の摂理を説き、人間に適用した）や儒教が絡み、日本独特の混合宗教が長く日本人の心を支配することになりました。

こういういきさつが一般大衆の場まで降りてくると、神なのか仏なのか分からない偶像が、いたるところに建てられるようにもなり、ある時は中国の衣服をまとった神まで造られました。いまでは、お寺の中に神社が存在し、神社の中に仏教的な事物が存在することも珍しくありません。そこに何となく儒教や道教的な感覚も含まれています。普通の日本人が、自分は仏教徒なのか、神道の徒なのか、はたまた儒教の子なのか、分からなくなるのは当然です。これは、争いを好まない日本人の美しい性質、つまり造り主に似せて造られた性質の現れであると考えられる一方、高度な日本人の宗教意識の、さらなる廃頽と理解することが出来ます。

ところが江戸時代の末期、仏教や儒教や道教などと混合してしまった神道を嫌い、本来の神道に戻ろうとした人たちがいました。本居宣長や平田篤胤などに代表される、復古神道の提唱者たちです。ただ、彼らが本来の神道に戻ろうとしても、神道には教えがないことが問題となりました。そこで彼らは、何とかして本来の神道の体系を作ろうとしたのです。もちろん彼ら自身もいろいろと考えたはずですが、その際、参考にしたのが他の宗教の教えでした。特に当時はまだ禁じられていた、キリスト教の文献を手に入れ、その教えを模倣して、神道の神学ともいうべきものを造り上げたのです。

それから少し時代が進んで明治維新になると、日本は否が応でも西欧列強と付き合い、彼らに追いつき追い越さなければならなくなりました。そのためには、西欧の進んだ文明を積極的に取り入れるのが最善でした。しかし当時の日本の指導者たちは、西欧の文化の土台は

キリスト教であることを察知すると共に、植民地主義などに現れたキリスト教の残虐さまでも、いち早く見抜いていました。それで、キリスト教だけは絶対に取り入れてはならないと考え、日本の精神的礎となるものを探したわけです。徳川時代にキリシタン迫害のために優遇された仏教も、優遇された故に堕落しきっていたと判断され、日本の精神的土台として選ばれなかっただけでなく、廃仏毀釈という冷遇と迫害さえ受けることになりました。

幕末明治の時代の日本の指導者たちが、日本の精神的礎として選び出したのは、日本人の魂の故郷でもあった、神道でした。しかし古から続いてきた「教えのない神道」では、いささか頼りないために選び出されたのが、本居宣長や平田篤胤らが提唱していた、復古神道だったのです。

ふつう、神道が日本の国教になったと言われますが、実際は、日本人の気高い宗教意識の現れに近かった本来の神道ではなく、それからは一歩も二歩も堕落した、「キリスト教まがいの神道」だったのです。そして、それまで言われていた「和魂漢才」という言葉を「和魂洋才」に変え、西洋の才は取り入れても魂だけは大和魂でなければならないと、天皇制を復古神道に固く結びつけ、これを国教とし富国強兵を進めたわけです。（神道を国教とされたと考えず、きわめて国教に近いものとされたと考える人たちも多い。）

それでも高尚な宗教意識を保持する日本人

日本の宗教社会は神道と仏教の習合を始め、いたるところに宗教の混合があります。1945年に敗戦を迎えると、GHQによって国家神道は解体され、天皇は人間宣言をさせられて、まさに混沌とした宗教文化ができました。いわゆる宗教人口と呼ばれる、各宗教団体が主張する信徒数を合計すると、日本の総人口の倍以上になるという始末です。これに、唯物論的科学主義と言う「神を信じない新種の楽観的宗教」もはびこり、この信徒までも合わせると、三倍ほどにもなることでしょう。

それで日本人の多くは自分の宗教が分からなくなり、平気で「私は無宗教です」と言い、「神なんて存在しません」と断じるのです。それでいながら、あの気高い宗教本能というか、至高の存在を感じる宗教性を持ち続けているのです。ただほとんどの日本人は、自分がその気高い宗教意識を持っている事実を、あまり意識していないことです。でも、これまで筆者が多くの日本人と話し合った経験では、たとえ彼らが無神論者だと自称し、仏教徒だと思い、神道系や仏教系の新興宗教の信徒であると言っていても、よく話し合ってみると、すべての人が、そのような目に見えず手で触れることもできない、気高い存在を意識したことがあるということです。落ち着いて話し合うと、必ず、自分の中にそのような直感的感覚、あるいは本能的意識があることを認めます。

ですから、筆者は、「神なんていないと」豪語する、一見無宗教、無神論と見える人に伝道するときは、「私も神なんていないと思います」と心から同調します。日本人がふつう神と呼んでいるものなどは、私たちが感じている崇高な存在者ではないからです。日本人は神ではない神を感じているのです。神以上の存在者を感じているのです。神なんていないと断言し、自分は無宗教だと言い切る人でも、日本人なら大抵の場合、気高い宗教心を否定せず、崇高な存在者に対する感覚を無視することは少ないからです。このようなことは、簡単な宗教調査には現れてこないものです。反対に「私は神様を信じています」とおっしゃる方には、「そうですか、私も神様を信じています」と応じます。私も同じだという意識を築いたうえで、「それで、どのような神様を信じておられるのですか」と尋ね、共通点と相違点を見分け、共通点を強調し、積極的に正しい感覚を認めて上げます。聖書が教えている、創造者であるお方を理解できるように話を進めます。

Ⅲ.　日本人が感じる気高い存在と聖書の神

ここで、はっきりさせておかなければならないのは、多くの日本人が曖昧ながらも感じている至高の存在が、そのまま聖書が教える天地創造の神であるとは言えないことです。再三にわたってくり返してきましたが、日本人の多くが感じているのは非常にあいまいで、うっすらと霞み、ぼんやりとした、至高の、あるいは人間を超越した存在であって、それを言葉で表現させると、皆目わからない存在になってしまいます。記紀（古事記と日本書紀）に出てくる神話のようになってしまうかもしれません。ですから、彼らの宗教意識を彼らの言葉だけで表現させないで、彼らの心にある神に似せて造られた宗教性を、あたかもわずかの呼び水が深い水を引き出すように、わずかの示唆、少ない言葉で引き出してあげ、聖書の教える創造者について聞かせることが大切なのです。（蛇口をひねって水を得て来た若い方には、「呼び水」などと言う言葉自体が、分からないかもしれませんが。） 聖書の教える創造者は、人間が直感的に感じる存在を、人間があれこれと説明したものではありません。それは人間の頭脳と言葉をもっては不可能なことです。聖書の創造者についての教えは、創造者自らが、御自分について教えてくださった、啓示だからこそ可能だったのです。

天地の創造者の曖昧な理解

実は、聖書で語られている至高の存在者、天地の創造者であるお方も、あまりにも人知を超えた存在であるために、非常にあいまいにしか理解されなかったのです。聖書の背景となった当時の世界には、多くの神々が存在していました。でも聖書の神は、それらのどの神とも決定的に異なっていました。ですから天地創造の神を表現できる、適切な「神」という言

葉も存在しなかったのです。それで今、日本語の聖書には「神」と翻訳されている言葉も、もともとはとても曖昧な意味合いでした。しかも聖書はそのあいまいさを幾分かでも明らかにするためか、「神」という言葉を一つだけではなく、いくつも用いているのです。

この創造者であるお方が、モーセに現れて下さったときの自己紹介は、「私はあるというものである」という、はなはだ哲学的、形而上学的で、現代の私たちでさえも、その意味の深さを測り得ないものです。イスラエル人の先祖であったアブラハムの神知識は、どれほどのものだったのでしょう。聖書はまだまだ書かれておらず、あったのはアブラハムの直感的神感覚と、創造者であるお方が時折、アブラハムに直接ご自分を現してくださったことによるものです。ですから理性的な知識という面では、現代の私たちより遥かに劣っていたはずです。ところが、神との直接の交わり、お付き合いということによるアブラハムの神知識と信頼は、非常に深いものでした。それはちょうど、私たちが母親に対して持っている知識に似ています。私たちの知識は生まれてからこの方、母親に抱かれ、乳を飲み、手を取ってもらったなどの、経験を通しての知識であって、身元調査人が調べ上げた知識とは別のものです。

アブラハムの救い

大切なのは、このようなアブラハムの知識でも、彼が義とされるには充分だったことです。アブラハムの救いは、創造者に対する彼の理性的な知識にはよらず、それまでの交わりの体験に根差す、情緒的な信頼によるものだったのです。創造者はアブラハムの頭脳による知的理解よりも、心による情緒的な信頼、そしてその信頼が起こした行動を大切にしてくださったのです。

アブラハムは信頼（信仰）によって義とされました。普通の言い方では、信仰によって救われたのです。私たちも同じ信頼によって救われました。ただ違うところは、私たちはイエス・キリストを信頼して救われたのです。イエス・キリストの生涯と十字架の贖いを教えられ、それを真実の物語だと信じ、イエス・キリストを自分の救い主であると信頼して、救われたのです。でもアブラハムは違います。彼は、イエス・キリストについては何も知りませんでした。その自己放棄の誕生も、人間として完璧な生活も、十字架の贖いの死も、最終の敵である死を打ち破っての甦りも、知りませんでした。キリストを信じる信仰についても、必要と言われる悔い改めも、知りませんでした。彼の救いは、イエス・キリストを自分の救い主として信じる信仰には、よらなかったのが明らかです。

ではアブラハムにとっての救い主は誰だったのでしょう。イエス・キリスト以外に、救い主がいたのでしょか。旧約時代には、イエスによらない救いがあったのでしょうか。そうで

はありません。人類の救い主は只おひとり、十字架で贖いの死を遂げられたイエス・キリストだけです。

私たちの知識か創造主の知識か

アブラハムのような旧約の人たちは、イエス・キリストを知って、彼を信じる信仰によって救われたわけではありません。たとえ彼らが、イエス・キリストについて知らなくても、天地創造の主はご存知であったのです。彼らの救いは彼らの「知識という行い」によらず、あくまでも創造主の知識、神がキリストについてのすべてをご存知だったという、事実に基づくのです。

そうだとするならば、イエス・キリストを知らないで救われることは、現代でもあり得るのではないかという、問題が持ち上がります。日本人のように聖書という啓示を知らず、創造者の直接の顕現も体験せず、イエス・キリストという存在についても、非常に限られた知識しか持っておらず、しかもそれが、かなりの誤解や先入観のある知識である場合でも、イエス・キリストとその働きを正しく理解したうえで、信じることが求められるのでしょうか。西欧から輸入された神学では、そのようになっているかも知れません。

しかし私たちの教会の、実際の指導ではどうでしょう。私たちの教会では、救いのためにどれだけの知識を期待し、どれほどの理解を要求しているでしょうか。たとえ、どれほどきちっと教えたとしても、正しく理解されることなどあり得るのでしょうか。筆者などは、50年以上も伝道者を続けながら、イエス・キリストの十字架の奥儀など、充分に説明することはできません。それどころか、満足に理解さえできていません。

十字架の上で死を目前にしながら、キリストから救いの約束を頂いたと思われる、あの強盗殺人者は、キリストについてどれだけ理解していたのでしょう。彼の言葉には信仰の告白として、あるいは悔い改めの言葉として、受け入れられる程の内容があったのでしょうか。でも日本の牧師や信徒たちは、かすかに信仰がくみ取れそうな言葉を取り上げて、慰めにしているのではないでしょうか。おじいちゃんが死ぬ直前に、僅かに語った信仰的に聞こえる言葉、お母さんが亡くなる前に、クリスチャンである子どもたちに語った、クリスチャン的な言いまわしが、信仰の証と受け取られてはいないでしょうか。それよりも、日本人クリスチャンの内のどれだけの人が、キリストに対するしっかりとした知識と理解をもって、クリスチャンと認められたのでしょう。多くのクリスチャンは知的理解よりもむしろ情緒的な決心、あるいは決心もないまま、何となくクリスチャンの仲間に加わって、自分はクリスチャンになったと思ったり、思われたりしているのではないでしょうか

もしもキリストによる救いが、キリストとその働きについて正しく理解することを、前提として求められたならば、筆者などは決して救われなかったことでしょう。キリストとその働きを、ある程度正しく理解すのは重要であり必要でしょう。しかしそれは救いの条件ではないはずです。

新約聖書の教えは？

では、「救いはキリストを知り、キリストを信じることによると」語る、新約聖書の教えはどうなるのでしょう。新約聖書を素直に読む限り、そのように教えられていますし、悔い改めさえも要求されています。そこで筆者は考えます。新約聖書は基本的に、旧約聖書をある程度、あるいはかなり理解している人、ユダヤ教の教えについても相当の知識を持ち、罪についてもある程度の自覚を持っている者を、読者として想定して書かれているのだと。

確かに新約聖書の多くを書いた使徒パウロは、キリストを信じる信仰が、救いに至る絶対条件であるかのように書いています。また、パウロは異邦人宣教の使徒であり、異邦人教会に向けて書簡を送りました。でも、彼の聴衆や読者の大部分は、すでにユダヤ教の知識を持っていた人たちであり、キリスト、すなわち救い主を待望していた人たちでもあったことを、良く考慮しなければなりません。パウロはパウロの時代の、パウロに任せられた人々という条件の中で、あのように書いたのです。

パウロは、与えられた時と場という事情の中で書いたのであって、普遍的な読者を前提として書いてはいないのです。その与えられた条件の中で書かれた、ある意味で特殊な教えを、そのまま普遍的な教えとすることは正しくありません。そこには普遍的に適用できる部分もたしかにあるとしても、すべてがそうなのではありません。むしろ普遍的な教えを、パウロの周辺事情に適応させて書いたところが多いのです。女は髪を編んではいけないとか、ベールを被れとか、教会では黙っていなさいと言う教えも、あくまでも彼の時代と場所という条件に、普遍的教えを適用したものであり、現代という時代と日本という場所に、その適用をそのまま持ち込んではならないのです。

言い換えると、パウロは、日本人のような、まっさらな異邦人を想定して書いてはいなかったのです。さらに、パリサイ派の秀でた学者だったパウロは、あくまでも「ユダヤ人という立場」から書いて、福音はユダヤ人に留まらず、全世界の人たちに公平に及ぶと主張したのです。異邦人の立場に立って、福音は初めからすべての民族の救いを目的として計画され、その過程において、イスラエル人が重要な役割を果すように、「選ばれまた用いられた」という言い方はしていないのです。だからこそパウロは、キリストを信じる信仰だけによって救われるという議論をしながら、突然話題をアブラハムに飛ばしてしまうことができたの

です。

確かにアブラハムはユダヤ人の先祖ですが、ユダヤ人ではなかったはずです。まだ、律法も与えられていなかった時代の人です。そしてパウロは何の説明もなく突然、「アブラハムは神を信じた。そして義と認められた」と、律法が付与される前の出来事を引き合いに出し、救いは信仰によるのであるという教えの、正当性を主張するのです。キリストを信じる信仰と、旧約時代の創造者である神を信じる信仰の、共通性も違いもまったく気に留めず、そのまま素通りしているのです。ローマ書４章２４節を読むと、パウロはキリストを信じる信仰ではなく、「キリストを甦らせてくださった神を信じる信仰によって」、私たちもアブラハムと同じ信仰による救いを獲得できると述べています。パウロにとってはキリストを信じる信仰と父なる神を信じる信仰は、まったく同一だったようです

私たちは、パウロが書き残したものを「霊感を受けた誤りのない神の言葉」として受け入れながら、その記述を特定の時と場という条件から解放し、その記述の基盤となっている普遍的教えを探り出し、その普遍的な教えの上に、現在の自分たちに必要な神学を構築し、発展させて行く使命を持っているのです。パウロが書いたものに限らず、新約聖書の教えは、基本的に、旧約聖書をかなり理解していたユダヤ人クリスチャンと、ある程度理解していた異邦人クリスチャンに対して書かれたものですから、まったく聖書を知らない異邦人である日本人には、あくまでも日本人の感覚の中で理解出来るように、きっちりと解き明かされなければならないのです。

悔い改めについて

たとえば、救いには悔い改めが必要であるというのが、新約聖書から導き出される教えですが、これは、天地の造り主について朧げな感覚しか持ち合わせていない、日本人にも適用されるべき教えでしょうか。少なくてもアブラハムには求められませんでした。しかしたとえば、パウロはアテネでまったくの異邦人を相手に、「神は、そのような（偶像礼拝の）無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこででもすべての人に悔い改めを命じておられます」と語り、異邦人も悔い改めなければならいと主張しているかのようです。あるいはアグリッパ王の前で、パウロは「さらに異邦人にまで悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと宣べ伝えてきたのです」と語って、異邦人にも悔い改めが必要であるかの様に言っています。これをどう理解すべきでしょう。

ここでパウロが用いている「悔い改め」というギリシヤ語は、もともとは悔い改めというほどの強い宗教的意味を持っておらず、「考え方をかえて」というくらいの意味だったということです。その言葉が、紀元前二世紀ころ、ふつう七十人訳と呼ばれる旧約聖書のギリシ

ヤ語翻訳が行われたとき、ヘブル語の「悔い改め」を現す言葉に用いられたのです。その聖書が多くのユダヤ人たちの間に広められたため、ユダヤ人の間ではこの言葉に宗教的な意味を持たせ、「悔い改め」の意味で用いられるようになったものです。しかしパウロの時代には、そのような意味合いをつけて用いていたのは、まだユダヤ人だけに限られていたと考えるべきです。

パウロは、アテネでもアグリッパ王の前でも、ユダヤ教化されたギリシヤ語を用いたのではなく、もともとのギリシヤ語の意味で語ったはずです。アテネの人々やアグリッパ王が用いていたのは、ユダヤ教化されたギリシヤ語ではなく、もともとののギリシヤ語だったと考えるべきだからです。つまりパウロは、ユダヤ人に求めるような宗教的悔い改めを求めたのではなく、「考え方、理解の仕方」を変えて、天地の創造者を信じるようにと語ったということです。ユダヤ人と同じ悔い改めを、異邦人に求めてはいなかったと判断できるのです。それから時が移るにしたがって、クリスチャンの間では、そのギリシヤ語が悔い改めの意味で広く用いられるようになったのは、当然のこととして考えられます。

日本人に悔い改めを語るとき

日本人にも悔い改めを求めることに、反対ではありません。むしろそうしなければならないと信じています。しかしそれは、少なくても天地の創造者、全能の絶対者について、しっかりと基本的な理解を持ってもらってからの話です。優しく恵み深く、悪い人にも良い人にも太陽を昇らせ、雨を降らせてくださる全能者を知った後ならば、自分が罪人であることも容易に理解でき、納得することもできるでしょう。しかし初めから、「あなたは罪人です。悔い改めなければ、神の刑罰が待っています」では、日本人は反発を感じるだけです。

筆者は個人的に、悔い改めという言葉は伝道の中ではほとんど用いなくなっています。そのかわり、「この恵み深く気高いお方に、私たちは何から何までお世話になっています。命も与えられました。守られても来ました。でもきちっとお礼をしてきたでしょうか。曖昧に済ませてはいなかったでしょうか。それでは義理を欠いていませんか？ 不義理ではありませんか？」と尋ねます。あるいは、「日本語には親不孝と言う言葉があります。最も悪いことの一つですね。でも私たちは、命も食べ物も、住むところも、安全も、すべてを整えてくださった父なる神様に、親不孝を重ねてきてはいないでしょうか？」と問い詰めます。すでに恵み深い造り主なる神を体験するように導かれていた日本人なら、たいてい、「自分は不義理を重ねていました。親不孝を続けていました」と告白します。「それでは、私と一緒に、ごめんなさい。どうかお赦し下さい」とお祈りいたしましょうと、導くことが出来るようになります。このような赦しを求める悔い改めの方が、お母さんの財布から、百円玉を盗んだことを悔い改める、「悔い改めの祈り」よりは、悔い改めの本質に近い悔い改めだと思いま

す。

アブラハム・イサク・ヤコブが知っていた神

筆者の知っていたクリスチャンに、美奈子さんという方がいました。マニラで知り合い親しくしていたのですが、日本に帰国してから癌を患い、死を待つベッドに横たわっていた時、横浜の病院にお訪ねしたことがあります。とても明るく美しい方で、尼さんのようになった頭も隠さず、朗らかにお話しして下さいました。「少し前、主人がとうとうクリスチャンになる気になったらしいのよ！ 神様にお祈りしたって言ってくれたの。それがね。『美奈子の神様』って始まる祈りだったのよ。『なんて呼び掛けていいのかわからなかったから』ですって！」

天地創造の神は、長い間、なんて呼び掛けたらいいのか分からない神様でした。それでイスラエルの人々は、自分たちの先祖であるアブラハムが信じていた神、その息子のイサクも信じていた神、さらにその息子のヤコブも信じていた神ということで、この３人の名前を被せ「アブラハム、イサク、ヤコブの神様」とお呼びしていました。「美奈子の神様」も、否定されるべきものではありません。八百万の神々がある中で、仏教と習合した神も大勢いる中で「神様仏様」と、ラッシュアワーの人ごみの中で「オーイ。オマエーッ」と呼ぶようなことをせず、おひとりの方だけを特定して、その名前をお呼びすればいいのです。

また旧約聖書の天地の創造者への呼び方は、時間の経過とともに、ある程度特定の言葉に定着したのですが、たとえそれを書き言葉として用いたとしても、口に出すのはあまりにも畏れ多いと、読むときには他の言葉を代用したものです。そんなことが数百年も続いたため、とうとう発音の仕方がわからなくなってしまったという変遷もありました。これがたぶん、「ヤーウエ」と発音したのだろうという見解が定着したのはつい最近のことです。ある疑似キリスト教団体は、ヤーウエが学者の意見として定着する前に創立されたために、いまでも、当時の一般的理解であった「エホバ」という名を、自分たちの呼称として用いています。

父なる神

父なる神という概念は、キリスト教だけのものではありません。多くの宗教に類似のものがあります。ユダヤ教の中にも、すでにその概念の芽生えがありますし、母なる神と言っても良い概念も同じユダヤ教の中にあります。本来、天地の創造主に性別はありません。父でも母でもないのです。したがってこれは擬人化に過ぎません。数十年も前に、アメリカのフェミニストのグループが、「父なる神」という言葉を嫌い、「母なる神」と翻訳したという話があります。一方、日本の宗教家や社会学者、あるいは民族学者たちの多くが、キリスト教

の「父なる神」という概念が、日本でのキリスト教の伝播を妨げているとも言っています。日本が必要としているのは厳しい父なる神ではなく、どこまでも優しく、慈しみ深く、赦し、受け入れ、抱きしめてくださる、母なる神だというわけです。なるほど一理はあると感じます。私たちは母なる大地と呼び、母なる海について語ります。父なる神と呼ばれるキリスト教の神は、厳しく怖く、罪を罰し、打ち叩いて従わせる恐ろしいお方という、硬いイメージを抱かせます。

ただしそのような主張をする学者たちは、聖書の教えをほとんど知らないのでしょう。旧約聖書の中では、神を父と呼ぶことはありませんでした。父のイメージを重ね、母のイメージを被せる事はあっても、そのような人間的親しみを感じさせる呼び方は、畏れ多くてできなかったのです。

キリストが用いた「父なる神」

それを大きく変えて、「父」とはっきり語られ、また教えられたのがキリストです。そこで強調されたのは、近くにいて守り助ける優しい父のイメージです。当然、当時の父系社会の中の父の権威や力などにも、イメージは重なりましたが、圧倒的に、守り助けることが出来る力強く、優しいお方が最初です。お名前を口に出して呼ぶことも恐ろしいと思われ、その超絶した性質が強調されていた時代に、神の親しみやすさ、身近さ、肉親の愛にも通じる、愛の細やかさをお語りになったのがキリストだったのです。それをさらに強調したのがパウロで、「アバ」と呼ばせてもらうことができると、教えています。「アバ」とはユダヤ人の幼児語で、「お父ちゃん」よりももう少し砕けて、「ちゃん」くらいの意味でしょうか。

多神教だから和を好むのか

また日本は多神教で、どのような神であっても争わずに受け入れる。そのような性質が、どんな人であっても受け入れる寛容性につながっている。それに比べて、一神教の神は常に排他的で争っている。それが人間社会でも他者を排し争う態度につながると、主張する人たちもいます。戦ばかりをくり返して来たキリスト教の国々や、残忍なことでも平気でやってしまう一部のイスラムの人々を念頭に置いて、そのようなもっともらしく聞こえることを言っていようですがが、それも主客転倒の論議です。またそれは、「神」の定義もできていない論議です。

日本の「神々」と同類の存在が、キリスト教では、「神」の名が被せられない様々な霊的存在として認められていますし、ほとんどの国々はアニミズムであり多神教です。多くの多神教文化では、戦争の神々も存在しているのです。日本人が本質的に争いを好まないという

のが本当であると仮定しても、それは多神教文化だからというのはまったく的外れです。日本人が争いを好まないというのは、むしろ稲作を中心とした、外敵が少ない島国の、定着文化だったところに負うものす。移住が簡単な麦やトウモロコシの文化で、常に近隣の外敵に囲まれていた大陸の文化では、いつも戦いの備えをしていなければなりませんでした。ましてや移動性の激しい牧畜文化では、争いに勝つことが大切であって、仲良くするのは小さな身内だけで良かったのです。

また稲作文化の中では、牧畜文化ほど豊穣の神を祀りませんし、豊穣に結びつく性行為にも結び付きません。たとえ結び付いたとしても、牧畜文化のような直接の性行為ではなく、精々「稲妻」程度の感覚です。そこにあるのは雄雌の文化ではなく、作物を育ててくれる自然を崇める文化であり、その自然を支配しておられる大きなお方に対する畏れです。

優しさや和を大切にする日本人に求められるのは、母のような神様かもしれません。キリストの教えた父なる神は、父のような神、母のような神という意味なのです。父なる神を母なる神に対比して語るのは、誰かが思いつきで言い出したことを次々と引用して語り、権威付けをする論文の怪しさです。

和の文化のよそ者に対する扱い

ただし定着文化が創り出した「和」は、裏を返すと直ちに「よそ者」に対する疑惑と排除と差別につながります。日本人がよそ者と判断した場合の、冷淡さ、残虐さ、冷酷さは、大変醜い差別として様々な形で現れてきました。日本人は、たとえ外国人にたいしてでも、彼らが日本人の心を理解しようと心がけ、日本人に溶け込もうとしていると判断すると、「うち」と見做して分け隔てなく取り扱います。ところが同じ日本人であっても、人の心を理解しようとせず、周りの人々に溶け込もうともしないで、勝手なことばかりする者は「よそ者」と見做し排除します。日本人は新来者に対して、しばらくは親切にしながら注意深く様子を伺い、「うち」の人間になるか「よそ者」になるかを判断するのです。それでいったん「よそ者」と判断すると、「てめぇら、にんげんじゃねぇや！」と、サムライ映画のようにばったばったと切り殺すまでは行かなくても、激しい排除や嫌がらせをすることになります。村八分と言われることが、実際に行われたということです。

このような「うちそと」に分けて仕打ちをする性格も、単なる生活文化による和を大切にしていたところから、恵み深い創造者の存在を理解するようになるならば、すっかり変えられていくものです。争いや差別は創造者のお心に反することであると認めて、悔い改めをすることが出来るようになります。単にひどいことをした人たちに謝るのではなく、その人たちを愛の対象としてお造りになった、創造者に謝ることが出来るようになるのです。

旧約時代の神は、強く、厳しく、鞭打つ創造主としてご自分を現しておられました。それはイスラエルというかたくなで、たちまち罪に陥り迷いでてしまう弱小民族を教え導き、神の独り子である救い主を迎えるに相応しくするためでした。そこではおおらかな信頼もさることながら、徹底した従順が求められました。周囲にはたくさんの強い民族がいて、難癖をつけてはイスラエルを攻撃して滅ぼそう、あるいは隷属させようと、隙を伺っていた中でのことです。

神はイスラエル民族を守るために、苦心惨憺しておられます。何しろ、心を持たない物を取り扱うのではなく、自由な意思をお与えになった、人間を取り扱うのです。人間の自由意思を尊重するため、全能の神とは言え、思いのままにはならない場合が多かったのです。イスラエル民族は、身代を狙う悪党どもに取り囲まれていながら、それに気づかず、悪さばかりして失敗をくり返すドラ息子のようなものでした。それを何とかまともな人間に成長させようと、苦心惨憺悪戦苦闘する父親のように、本来の優しさや思いやりの深さが奥に引っ込み、厳格さや峻厳さが表に現れていたのです。

キリストが描き出された神

キリストがお教えになった神は、同じ神でありながら、恵みと慈しみに富む、優しく抱き、包み込むような神なのです。「蒔くことも刈ることもしない空の小鳥たちをも、養ってくださる神なのだから、あなたたちにもっと良くして下さらないわけがあるだろうか」と、キリストは諭されたのです。旧約の時代には隠されていた創造主の、情けと憐れみ、豊かな思いやりや心遣いという、本来の優しい面に光を当てて下さたわけです。

また旧約聖書では、民族とか国家というものに焦点が当てられ、わずかの例外を除くと、偉大な人物や巨大な指導者に注意が向けられていますが、キリストの教えの中では、一人の人間、特に、弱く貧しく小さな個人に目が向けられています。天地の創造者である無限に大きく強い神が、ゴミ溜めのような社会の片隅で震えながら生きていた人々に、そっと手を差し伸べてくださる方のように描き出されています。キリストが描き出された神は、人間が厳格に教えを守って落ち度なく、清く正しく生きることよりも、明日のことを思いわずらわず大らかに生きること、ご自分に全幅の信頼を置いて生きることをお喜びになる神なのです。その信頼があってこその、清い生活、正しい生活なのです。

放蕩息子の譬えを理解できない日本人

父なる神の優しさ、憐れみ深さを、キリストは有名な放蕩息子の譬えで教えてくださいま

した。非常に感動的なお話です。たぶん、イスラエル人にはこの譬えが良く理解できたのでしょう。また、キリスト教文化に生きていて、自分たちは霊的イスラエルであり、真実のイスラエルだなどと勘違いしていた、多くの西欧キリスト教国の人々にも、理解できたのかも知れません。しかし筆者には、まったくピンと来ないお話でした。話としては理解できないこともなかったのですが、自分に適用して理解することはできなかったのです。鈍い人間で呑み込みが悪かったのもあったでしょう。でも、自分が日本人であったという事実が、大きく影響していたものと思います。理解できるようになったのは、正直なところ、クリスチャンになってずいぶん経ってからのことです。

イスラエル人には、呼び方はともかくとして、神を父とイメージすることは不可能ではありませんでした。キリスト教を文化背景にもつ人々には、神を父と考えることはごく普通の事でした。ところが、そもそも日本人には、「父なる神」という感覚はありません。その父なる神をおいて家を出た覚えもありません。放蕩に身を持ち崩したこともありません。ですからこの罪深い息子が、自分であるなどと理解することは絶対にありえません。たとえ説明を受けたとしても、実感をもってそれを受け入れることはできません。いちど捨てた父の許に、深く悔いてたち帰るなどという感覚も、まったくあり得ないことです。

キリストの放蕩息子の譬え話も、直接には、イスラエル人という特殊な人々を対象として語られたもので、決して全世界のすべての人々を対象にしたものではありません。ましてや日本人を念頭に置いたものではありません。日本人に理解できないのは当然です。日本人に実感を持って理解してもらうには、放蕩息子の物語の普遍的な部分を掘り出して、それを改めて、日本の文化の中で語り直す必要があるのです。それをするには、まず日本人に「父なる神」という概念を理解してもらわなければなりません。父なる神、創造主なる神を理解することなしには、この物語も聖書全体の教えも、理解することは無理なのです。

病院で会った女性の話

昨年、一人の女性を神の御許にお送りしました。彼女は治る見込みのまったくない重病で入院していたのですが、最初にお会いしたときは、ごく普通の苦しむ日本人でした。筆者が牧師であることを知って、少しばかり迷惑そうに、「キリスト教の神様についてのお話しですか？」とおっしゃるので、「いいえ違います。私は、多分あなたが幼かったころから、ずっと心の奥深くで、感じて来たに違いないと思うお方について、お話ししたいのです」とお応えしました。そして、その心の奥深くで感じて来た、大きく、気高く、優しく、強く、正しく、良いものにも悪いものにも太陽を昇らせ、雨を降らせてくださる恵み深いお方について、お話しさせてください」と切り出したのです。そのお方こそ、私たちが天地の造り主とお呼びするお方であることに、納得してもらいました。5 分から 10 分の面会を毎週一回続

けて、ここまで来るのに 4 カ月ほどもかかりました。

それから、この天地の造り主がどれほど恵み深く、やさしく、人間を愛してくださっているかをお話ししました。彼女の体の具合がよい時には、30 分ほどもお話ししました。この天地の造り主で、人間をも造ってくださったお方を、天の父なる神様と呼んで信頼し、すべてのことをお任せして、空の鳥のように大らかに生きることも教えました。命を与えられ、生かされていることを感謝し、喜び、このお方にありがとうございますと言い、礼拝をすることもお教えしました。やがて、この世の次元もあの世の次元も支配しておられる、無限の神に信頼する平安が、彼女の心に宿ったことを見て取って、私は安堵したものです。

半年も相当過ぎたころ、彼女は言いだしました。「私のような醜い人間が、こんなに大きく気高く尊いお方に、図々しく近づき、お祈りしたりできるのでしょうか？」 それで、「安心して近づき、祈り、甘えてください」とお話ししました。「本当は、私たちのような汚い人間が、近づくことなどできないお方ですが、このお方がご自分から、すでに、すべての問題を解決してくださっています。私たちが恐れなく近づくことが出来るように、ことごとく整えてくださったのですよ」と、独り子イエス・キリストの贖いの話をしてあげました。彼女は一言も質問をしませんでした。ただただ感謝と喜びを顔一面に表して、聞いておられました。

それから、彼女の一番の問題は、造り主に対する不義理であることを教えました。これほどたくさんの大きな恵みを頂いていながら、きちっと感謝を伝えてこなかったからです。またそれは親不孝にも似た、造り主であるお方に対する不孝であるとも、お話ししました。それが普通、キリスト教では罪と呼んでいるものであることをも教えました。それからいっしょに、その不義理と不孝を謝る祈りもしました。

筆者は彼女の立ち姿を一度も見たことがありません。もちろん、教会の集まりに来たこともありませんでした。でもそれから召されるまでの一年弱の間、かわるがわるに訪ねる私たちの教会の信徒たちと、楽しく語り合い、感謝の祈りをし、本当に平安と喜びの内に過ごされました。神を敬い、人を愛するということが最も大切だと学び、寝たきりのベッドの上でも感謝と賛美の祈りをし、看護師や掃除をしてくださる人たちに、明るく挨拶することから始めました。器用だった手先を生かし、色々な折り紙細工などを作っては、お世話になった方々にお礼として渡したりしていました。

彼女には、罪の話も悔い改めの話も、イエス・キリストの十字架の話も、問われるまではしませんでした。天地の造り主が、自分が幼いころから心の奥に感じて来た、尊く大きくやさしく、自分に命を与えてくださったお方だということを理解して、初めて、彼女は自分が

この造り主の前に出る資格のない者だと悟ったのです。そのことについて尋ねられたとき、初めて、神がお定めになった贖い主、キリストについてお話しをしてあげました。彼女がいつどの時点で救われたのか、永遠の命を獲得したのか、神の子となったのか、筆者にはわかりません。それを判断するのは神の領域であり、私たちの責任ではありません。でも、彼女が自分の国籍がある天に昇り行かれたことだけは確かです。

初めてお会いしてから天に送るまで、わずかの間でした。実際に会ってお話しした時間も、ごく僅かだったと思います。でも、本当になんの躊きもない伝道と指導でした。このような伝道方法で導き、天にお送りしたのは、二年前の八十歳の男性と彼の奥様に続き、彼女で三人目でした。

原罪の問題

日本での伝道を困難にしている大きな要因の一つが、原罪という考え方、あるいは神学です。これはすべての人間は罪の性質を持っていて、罪を犯さないではおれないという、キリスト教独特の教えです。この原罪は、すべての人間の先祖であるアダムが犯した罪の結果、すべての人間は罪の性質を引き継いでいるという、はなはだ不条理な教えです。先に挙げた氷点の主人公が自殺をするに至る罪の意識は、確かに、クリスチャンであった作者の中にあった、原罪の理解から来ているのだと思いますが、それは聖書の教えではないのです。むしろ、「親の因果が子に報い」という通俗仏教の感覚に近いのではないでしょうか。不条理な教えではありますが、伝統的キリスト教会のほぼすべてが、この教えを固持しているのもまた事実です。

西欧のクリスチャンたちによれば、クリスチャンは神の救いに与って罪を赦されていますが、日本人の多くはクリスチャンでありませんから、原罪に支配された罪人のままです。ですから日本の文化は罪人の文化です。日本の教育は罪人の教育です。日本の政治は罪人の政治です。日本人の会話は、表面を取り繕うだけの嘘に満ちた罪人の会話です。日本という国全体が罪の上に建てられているのです。ですから、自称キリスト教国から来た宣教師たちの多くは、日本を偶像国家と断罪し、日本人を罪人であると糾弾し、罪を悔い改めない日本人をかたくなであると責めたてました。でも日本人は、悔い改める罪を理解できなかったのです。キリスト教の歴史の中でも最大の説教家のひとりと言われた、スポルジョンというイギリスの牧師が、「罪について語るときは、地獄の火の熱さを感じるほどに、激しく語れ」と教えたそうですが、多くの宣教師たちはそんな風に、日本人に罪の刑罰の地獄を情熱的に語り、悔い改めに導こうとしたのです。

彼らは、キリストがユダヤ人たちを罪人と断じて、お責めになった姿をそのまま真似たの

かも知れませんが、ユダヤ人が罪人と責められるのと、日本人が罪人として責められるのには、大きな違いがあります。長いキリスト教文化の中に生きていたイギリス人が、地獄の火の熱さを感じられるほどに、厳しく罪を責められるのと、聖書は知らないし、教会もない、天地創造の神についてさえも聞いたことがない日本人が、同じように責められるのでは、まったく異なった結果となります。くり返しますが、日本には神の律法が記されている旧約聖書がなかったのですから、キリストの断罪の多くは、日本人に適用することはできないのです。律法のないものは律法によっては裁かれないというのが聖書の教えです。一方では、「日本人が罪を理解することはない、日本の文化は恥の文化だ」などと言う、知らず知らずのうちに上から目線になった、アメリカ人の日本文化論ももてはやされました。でも日本人には、目に見えない気高いお方に対する、自らの汚れを知る汚れの文化があったのです。パウロは、律法が来るまでも罪はあったが、律法が来てから始めて罪と認められたと語っています。律法を持たない日本人が、聖書の教えるような罪を自覚するはずがありません。しかし、神に似せて造られた人間の本性のために、日本人は目に見えない存在の前で、自分を恥じていたのです。

満州事変も、大東亜戦争も、太平洋戦争も、悪い日本の政治家と軍部の画策で起こされ、アメリカやイギリスなどと戦うはめになり、結局、天罰を受けて敗戦に至ったと、筆者も小学生のころから、アメリカに洗脳されていた日本人教師たちに教わったものです。確かに、日本人は先の戦争でたくさんの罪を犯しました。それは事実です。それが通俗の欧米キリスト教流に解釈されると、罪人の国家である日本が、無謀にも、キリスト教文化で繁栄していたアメリカやイギリスに戦争を仕掛け、原爆という天罰を受けて敗戦となったわけです。そんな無茶苦茶な言い草を、こともあろうに日本の人伝道者までもが言い広めていたのです。戦争をしていながら罪を犯したことがないなどという民族が、かつて存在したことがあるでしょうか。そんな国家があったでしょうか。

アダムの罪の性質が人類の血の中に流れ、あたかも遺伝のようにすべての子孫に及んでいると教える原罪は、西欧から持ち込まれたキリスト教の思想であり神学ですが、聖書の教えではありません。聖書は、はっきりと父の罪が子に及ぶことはないと教えています。父の犯した罪の結果が子孫に及ぶことはあっても、罪が性質となって子に及ぶことはないのです。この原罪という教えは、昔の教会が聖書の正しい学びをしないまま、アダムの罪の結果がすべての人間に及んでいるという、聖書の教えを無理に説明しようとしたものです。

アダムの罪の結果についての正しい理解

聖書は、すべての人間が生まれながらに罪人であると教えています。罪のうちに身籠られ、罪の内に生まれたのです。しかし、罪の性質が遺伝のようにすべての人間に及んだのではあ

りません。罪を犯した人類の祖先、アダムとその妻は神の御許から追放され、神の直接干渉をあまりうけない状況の中で子どもたちを生み、人間社会を形成したのです。人間は罪によって神から離れ、悪魔の支配する「この世」もしくは「この代」と呼ばれる世界で、自分たちの社会を築いたのです。厳密には神から離れたところなどありえませんが、神が直接支配する次元ではなく、悪魔が直接支配する次元に入れられたのです。この悪魔が支配する次元を、キリストを始めとする新約聖書の教えでは、「この世」あるいは「この代」と教えています。そこでは、悪魔が「この代の君」と呼ばれたり、「この世の神」とまで呼ばれたりしているように、悪魔が天下を取っているのです。神の直接の支配から離れた人間は、自分の自由意思で人間社会を形成して来たつもりでも、実際は罪の拘束の中、悪魔の支配下で文化を作り上げてきたのです。その中で生まれた人間は、すべて罪の中に生まれてきたのです。罪の拘束の中で身籠られたのです。

日本人の「日本人」という感覚はユニークで、大和民族の血が大切にされてきました。ですから、例えばブラジルに移民した日系３世が、ブラジルの国籍を持ちポルトガル語しか話せないでいると、「お前は日本人なのに日本語が話せないのか！」などと馬鹿にされることになります。ところがアメリカなどに代表される別の考え方では、たとえ観光旅行でアメリカ上空を飛んでいた母親が、急に産気づいてそこで産んでしまった子供であっても、アメリカ国籍が与えられます。その国の中で生まれた者は、みなその国の国民になるのです。聖書の理解によれば、現在の私たちが住んでいる世界は、悪魔が支配する国であり、そこに生まれたすべての人間は、罪の力に拘束されて生きているのです。それで人間は罪を犯さざるを得ず、罪の奴隷と呼ばれるのです。「神の国」あるいは「神の支配」というキリストの教えの中心主題を、まだ理解していなかった時代の教会は、悪魔の国あるいは悪魔の支配に生まれるという概念を知らなかったために、原罪などと言うおかしな神学を作り上げてしまったのです。

日本もアメリカも、どのキリスト教国も、仏教国もイスラムの国々も、すべて悪魔の支配下にあるというのが聖書の教えです。キリスト教文化などと言うものも、十八、九世紀の夢物語の名残で、そんなものは存在しません。キリストも聖書も知らない日本人より、もっと高い文化を持っているキリスト教国は、どれほどあるでしょうか。彼らは聖書を知っており、天地の創造者を知っており、今も生きて働いておられる復活の主までも知っているのですから、気高い精神と文化を持つのは当たり前です。それなのに、あの程度の精神と文化しか持っていないのです。キリストが伝えた福音は「神の国」（神の支配）の福音と呼ばれ、この悪魔の支配の中に生きている人間に、神の直接の干渉を可能とさせ、神の力によって新しく生きる希望を与えるものなのです。それが神の国の福音であり、神の国に生まれること、「生まれ変わること」「第二の誕生をすること」を勧められているのです。

悪魔の支配、悪魔の国に対比されるのが、神の支配、すなわち神の国です。キリストの教えを始め、新約聖書の主題はまさにこの神の国の到来であり、いかにすればこの神の国に入ることが出来るかという問題です。人間がこの世に生を受けたのは、まさに悪魔の支配する罪の世に生を受けたのであり、生まれながらに罪を犯さずにはおれない、罪の拘束の中に生まれたのです。ですからキリストは神の国に入りなさい。もう一度生まれ変わりなさい。神の国に生まれ直しなさいと強くお勧めになったのです。そしてそのためには、悔い改めることが、重要な要件でした。でもこの悔い改めの勧めは、すでに天地の創造者であるお方、人間を造ってくださったお方、自分たちの民族を救い助け続けていてくださったお方を、良く知っていた人々に与えられたものです。造り主は、ご自分を崇め畏れ礼拝していた人々に、悔い改めなさいとお勧めになったのであって。造り主を知らない人々にお話になったのではありません。

本当の悔い改めをするためには、天地を創造された絶対のお方、自分を造り生かし育んでくださった、大きく気高く強く優しく哀れみ深いお方を、まず知るというのがきわめて重要な要因なのです。日本人に伝道するために最初に遭遇する大切なことは、天地の創造者であるお方を示し、このお方に「天の父なる神様」と祈る素晴らしさを教え、このお方の恵みをたくさん実感してもらうことです。すると当然、自分がこのお方に不義理をくり返して来たこと、不孝を続けてきたことに気付くのです。

結び

これからの日本宣教を考えている人たちと話し合ってみると、みんな、方法論，方策論に終始しているように思えます。それも悪くはありません。私も 1969 年から、今でいう「セル方式」のようなことを、多くの人たちに先駆けてやっていました。そのために、正教師試験（按手礼を受ける試験）では試験官であった偉い牧師たちのお叱りを受け、見事に落とされてしまました。当時としては、とんでもない事だったのです。そんなやり方と並行して、信徒による伝道牧会も、フィリピン山岳地の未開部族や平地の部族の間でも試み、それなりの成果を上げてきました。

でも、今私が試みているのは、単なる方法や方策ではありません。もっと聖書の教えに根差した人間論から始まり、神の認識に及び、日本人をあらためて見直し、学び、福音が日本人にとっても福音であるように語ることです。福音は初めから全人類を対象としたものです。私たちはユダヤ人への福音のおこぼれに与っているのでも、西欧人のための福音の食べ残しを頂いているのでもありません。福音は初めから異邦人のためのものであり、日本人のためのものでした。それがユダヤ人を通して与えられたために、ユダヤ人という特定民族と

その文化の中で啓示され、説明されてきたものです。また、その福音は西欧の白人文化と環境の中で理解され、それが積み重ねられ、西欧の白人たちに都合がいいように、組み立てられてきました。そのような福音を持ち込まれ、提示されても、日本人には理解することも受け入れることもできません。

今私たちに必要なのは、聖書の理解をユダヤ文化や西欧白人文化から切り離して、普遍的な原則を探り出し、その原則を日本文化に適用して語ることです。その過程において最も大切なことの一つが、人間は造り主なる神に似せて造られていることであり、たとえ罪を犯して神を離れ、よじれ曲がり破壊されていたとしても、その神に似せて造られた姿はまだ残っている、消滅していないということです。これは「原罪」などというあいまいな神学よりも、よほど基本的な原則です。その神に似た姿をより良く保持している日本人は、本能的に造り主を感じていることを知るべきです。

私たちが福音を伝える場合、その日本人の中にかなり明確に残っている、神のイメージを橋渡しとして、語り始めるのが有効です。罪を責め、悔い改めを勧め、救い主キリストを信じるように勧める伝道では、多くの日本人は理解ができないし、救われもしないのです。アブラハムは神を信じて義とされました。日本人も、神を信じて義とされるはずです。自分がキリストの福音を理解することによって救われるのではなく、キリストの福音を計画し、実行し、すべての民族に有効にしてくださった、神の知識に基づいて、行いがないまま、理解がないままに救われるのです。

救われて、神の恵みを深く理解したとき、日本人も自分の罪と汚れをさらに深く理解するのです。神をきちっと知ることなしに、本当の意味で罪を理解することはありません。ですから日本人の悔い改めは、神を信じた後に行われるのです。神の愛と恵みの前に罪深さを実感するとき、キリストの贖いの働きが、がぜん輝きを持って、私たちの全存在に照り渡るのです。

付録

※※　依代（よりしろ）の意味について。　日本語の「依代」という言葉は、あまり用いられない時代になっていますが、日本人の宗教感覚、特に神道的な宗教感覚を語るには、欠かせない言葉です。ちなみに、**辞精選版 日本国語大典** では、「 神霊が出現するときの媒体となるもの。神霊の寄りつくもの。正月の年神の依代としての門松などのような特定の枝葉や

花・樹木・岩石、あるいは形代(かたしろ)・よりましなど、きわめて種類が多い」と、説明されています。しかし私のエッセイの中では、本来の日本語の意味を変えて、「無限の霊的存在である神が、人間にご自分の臨在を強く示すためにお用いになる、象徴的な事物」という意味で用いています。誤解されやすいのですが、日本語には私が表現したい意味の言葉がないための苦肉の策で、依代が最も近い意味を持つと思われるための借用です。とても不思議なことですが、聖書には、このような方法で神がご自分の臨在をお示しになっている事例が豊富なのに、英語には、神学的表現としても、一般的会話の表現としても、そのような意味合いの言葉がありません。伝統的なキリスト教には、聖書が大切にしているそのような概念が、まったく欠けている明らかな証拠となります。日本語の依代では、いわゆる憑依という現象、普通は「憑りつく」とか「のりうつる」とか言われる現象として語られ、聖書にもそのような事例が、多数記されています。しかし私がエッセイの中で、「依代」を用いる場合には、憑依の意味を完全に排除し、臨在の強調を語っていることをご理解ください。

Shrines as Dependents

Shrines, which can be found everywhere in Japan, serve as a place of refuge, just like large trees and oddly shaped rocks. No matter how magnificent the shrine may be, or whether it is a small shrine tucked away in the mountains, the Japanese do not believe that a supreme being resides there. It is just that the shrine speaks of the presence of such a being. The same is true of the temple that Solomon built and later became the symbol of the nation of Israel. The One who "transcends all things, pervades all things, is in all things, and contains all things in Himself" as a universal being would not reside in a building made by human beings, but it is a symbolic manifestation of His presence and a place of praise, honor, and worship. However, it is possible to "sanctify" it as a symbolic manifestation of His presence, a place to praise, glorify, and worship Him, and to strongly feel His presence. It is no wonder that Japanese people, who have always felt that the Supreme Being lives in nature, have maintained the custom of building a shrine, covering the surrounding area with trees, and carefully nurturing the trees until they grow into large trees.

The Decline of Japanese Deity Consciousness

The fact that Japanese people's sense of God denies idols and rejects both pictures and statues is admirable. Yoridai and monuments also seem to have been acceptable to God, as seen in the biblical accounts. However, man's foolish desire to understand God's image in a very concrete way led to a mistake. Michelangelo's famous painting of the Creator God is well known. It depicts a moment in time when God, represented as a fierce, elderly man, touches the weakly proffered finger of Adam, who did not yet have life, and is about to breathe life into him. I, who do not have an eye to appreciate paintings, cannot say what it means as art, but if you look at it from a religious point of view, it is beyond ridiculous or even appalling, and it is a proof of the total disregard for the teachings of the Bible, which is a terrible thing to hear about Christian art. The Bible repeatedly teaches us that the God of creation is invisible and incapable of physical touch. From the moment humans, who are like insects crawling around on the earth, attempted to explain this God, the religious mind of the Japanese people began to decline. Such attempts probably existed from prehistoric times, that is, before writing was used. However, it was only with the importation of writing that this became apparent, as evidenced by the two books Kojiki and Nihonshoki.

The Introduction of Buddhism and the Decline of Japanese High Religious Consciousness

The Japanese, who had led a primitive life, worshipping and holding festivals with a sense of the Supreme Being, were astonished by the arrival of Buddhism. People who had no religious object to worship and had been worshipping invisible beings in an extremely vague manner must have been crushed to their bones when they saw the brilliantly shining Buddha images. Furthermore, those who had been practicing simple rituals without any teachings must have been fascinated by the highly developed doctrines and philosophical teachings of Buddhism.

The introduction of Buddhism was truly a civilization-boosting event, but it was also a major step toward religious decadence. Many people adopted Buddhism and the intellectual and technological wealth of China and Korea as a superior civilization. Buddhism, on the other hand, was able to fill in the "gaps" in the Shinto religion, and by promoting mourning events, it was able to emphasize the vertical and horizontal

relationships among family members, relatives, and even ancestors. By strengthening the sense of belonging through blood relatives, Buddhism was able to build an even stronger foundation where previously the human relations of the residential community had been central to the Japanese sense of identification.

Shinto and Buddhism were able to coexist without much conflict. Of course, there were skirmishes, as seen in the conflict between Soga and Mononobe, but Buddhism filled the void left by Shinto. Nevertheless, Buddhism must have been a threat to those who were devoted to Shinto. In particular, they must have felt threatened by the lack of a developed Buddhist doctrine and philosophy in Shinto, especially as they learned about it. And so, despite the fact that the Japanese people's advanced religious awareness has kept them away from all idols, there is now a need to talk about their religious awareness and the origin of the Japanese nation according to their religion. This corrupted the high religious consciousness of the Japanese people and led to the creation of a lowly mythology, no less than Greek mythology, which has since come to be considered the basis of Japanese Shintoism. In the author's view, Shinto, while inheriting the high religious consciousness of the Japanese people, is in fact a corruption of that consciousness.

Further Decline of Japanese Religious Consciousness

Today, 80 percent of the Japanese are Buddhists and 80 percent belong to Shintoism. The math doesn't add up, but this is due to the ambiguous religious consciousness of the Japanese today. Many Japanese do not know the difference between Buddhism and Shinto. They are not even sure which religion they belong to. How did this happen? It is because Buddhism has existed to fill in the gaps in Shintoism, and Shintoism has accepted it without strong opposition. Japanese people have a very pragmatic side, and anything that is useful in their lives is good. Shinto, though defunct, has retained the generous religious spirit of the Japanese, and has preserved the sense of belonging to the Japanese people. Buddhism, with its doctrinal and philosophical development, is skilled in events dealing with death and exalts kinship in a way that Shintoism is not. Buddhism is so deeply embedded in the Japanese mind that even the sense of wabi-sabi, which is unique to the Japanese, is understood to be a part of Buddhism. Both Shinto and Buddhism serve the practical interests of the Japanese. This is the defeat of the advanced Japanese religious consciousness by the utilitarian sense, and is a step toward decadence.

syncretization of Shinto and Buddhism

Nevertheless, the conflict between Shintoism and Buddhism was also inevitable. Japanese utilitarianism, however, saw no profit in religious conflict. Instead of fighting, they would rather have them unite. This is where the mixing of Shinto and Buddhism, the so-called Shinto-Buddhist syncretism, occurred. This is a way of saying that the ancient gods of Japan are the Buddhas of Buddhism. From the Buddhist point of view, this is a manifestation of the true nature of the Buddha. In other words, the people in the West, where the people's understanding of Buddhism is higher, would not be able to understand the Buddha in Japan, where the people's understanding of Buddhism is still low, and so the gods appeared to them as gods. This was not entirely satisfactory to the Shintoists, and it does not seem to have been sufficient for the Buddhists, but it was enough to avoid a violent conflict, and the Shinto/Buddhist syncretism, a mixing of Shinto and Buddhism, took place. This was followed by the Chinese philosophy of Tendō (the providence of heaven) and Confucianism, which taught that the movement of the sun had certain rules and applied them to human beings, and this unique religious mixture dominated the Japanese mind for a long time.

As these circumstances descended to the general public, idols of gods and Buddha were erected everywhere, and at one time, even a god dressed in Chinese clothing was created. Nowadays, it is not unusual to find shrines inside temples and Buddhist objects inside shrines. There is also a sense of Confucianism and Taoism. It is natural that an ordinary Japanese person would be confused as to whether he or she is a Buddhist, a Shintoist, or a child of Confucianism. This can be seen as a manifestation of the beautiful nature of the Japanese people, who do not like conflict, a nature created in the image of their Maker, but it can also be understood as a further decadence of the highly developed Japanese religious consciousness.

At the end of the Edo period, however, there were those who disliked Shintoism, which had become mixed with Buddhism, Confucianism, and Taoism, and sought to return to the original Shinto religion. These were the proponents of Fukko Shinto, represented by such figures as Nobunaga Motoyoshi and Atsutane Hirata. However, the problem with their attempt to return to the original Shinto was that there were no teachings in Shinto. So they tried to somehow create the original system of Shinto. Of course, they themselves must have thought about it, but in doing so, they referred to the teachings of other religions. In particular, they obtained Christian literature, which was still forbidden at

that time, and imitated its teachings to create what could be called Shinto theology.

Then, a little later, with the Meiji Restoration, Japan had to deal with the Western powers and catch up with and overtake them, whether it wanted to or not. The best way to do this was to actively adopt the advanced civilization of the West. However, Japanese leaders of the time were quick to recognize that the foundation of Western culture was Christianity, and they were also quick to recognize the atrocities of Christianity as manifested in colonialism and other forms. So, thinking that Christianity should never be adopted, they searched for a spiritual cornerstone for Japan. Buddhism, which was favored during the Tokugawa period because of the persecution of Christians, was judged to be corrupt because of this favoritism, and was not only not chosen as the spiritual foundation of Japan, but was even subjected to the cold treatment and persecution of the abolition of Buddhism.

The Japanese leaders of the late Edo and Meiji periods chose Shinto as the spiritual foundation of Japan, which was also the spiritual home of the Japanese people. However, the "Shinto without teachings" that had been practiced since ancient times was somewhat unreliable, so they chose the Restoration Shinto advocated by Motooi Nobunaga, Hirata Atsutane, and others.

It is usually said that Shinto became the state religion of Japan, but in reality, it was not the original Shinto that was close to the expression of the noble religious consciousness of the Japanese people, but a "Christian-like Shinto" that had fallen one or two steps further from it. The Emperor system was firmly linked to the restoration of Shinto, and the Emperor's wealth and military power were promoted by making it the state religion. (There are many who do not consider Shinto to be the state religion, but something very close to it.)

Yet the Japanese still retain a lofty religious consciousness.

Japan's religious society has a mixture of religions everywhere, including the practice of Shinto and Buddhism; when the war was lost in 1945, GHQ dismantled the state Shinto religion and the emperor was forced to declare himself a human being, creating a truly chaotic religious culture. The total number of believers claimed by each religious group, the so-called "religious population," was more than twice the total population of Japan. In addition, materialistic scientism, a new type of optimistic religion that does

not believe in God, has also spread, and if its adherents were included, the total number would be three times as large as the total population of Japan.

Many Japanese are so confused about their own religion that they will say, "I have no religion," or even "God does not exist. And yet, they continue to have that noble religious instinct, that sense of a supreme being. However, most Japanese are not really aware of the fact that they have such a noble religious consciousness. However, in my experience with many Japanese people, even if they call themselves atheists, Buddhists, or followers of Shinto or new Buddhist religions, upon closer examination, they all have an awareness of such a noble, invisible, untouchable presence. We are all aware of these invisible, untouchable, noble beings. When discussed calmly, they invariably admit that they have such an intuitive sense or instinctive awareness within themselves.

Therefore, when I evangelize to seemingly irreligious or atheistic people who boldly say, "There is no God," I agree with them wholeheartedly, saying, "I don't think there is any God either. This is because what we Japanese usually call God is not the sublime being that we perceive. The Japanese feel a God who is not God. They feel a being that is more than God. Even those who assert that there is no God, and that they are not religious, are usually Japanese, because they do not deny their noble religious beliefs, and they rarely ignore their sense of a higher being. This is something that does not show up in a simple religious survey. On the contrary, when someone says, "I believe in God," I respond, "Well, I believe in God, too. After establishing the awareness that we are the same, I ask, "So, what kind of God do you believe in?" I distinguish the similarities and differences, emphasize the commonalities, and actively acknowledge the right senses. I proceed to help them understand who the Bible teaches is the Creator.

III. The Noble Existence as perceived by the Japanese and the God of the Bible

Here, we must make it clear that the supreme being that many Japanese feel, albeit ambiguously, is not the God of creation as the Bible teaches. As I have repeatedly stated, what most Japanese perceive is a very vague, hazy, and hazy supreme being, or a being that transcends human beings, and if we try to express it in words, it becomes a being that is completely incomprehensible. It could be like the myths in the Chronicles of Japan (Kojiki and Nihonshoki). Therefore, it is important not to let them express their religious consciousness only in their own words, but to draw out the religiosity in their hearts,

which is created in the image of God, with a few suggestions and few words, as if a little priming water would draw out deep water, and let them hear what the Bible teaches about the Creator. (The young who have turned on the faucet to get water may not understand the word "priming" itself.)) The Creator taught in the Bible is not a human explanation of some intuitive being. That is impossible with human brains and words. What the Bible teaches about the Creator was possible because the Creator Himself taught us about Himself through revelation.

An Ambiguous Understanding of the Creator of Heaven and Earth

In fact, the Supreme Being spoken of in the Bible, the Creator of heaven and earth, was so beyond human knowledge that He was only vaguely understood. There were many gods in the world at that time, which was the background of the Bible. But the God of the Bible was decidedly different from any of them. Therefore, there was no appropriate word for "God" to describe the God of creation. So the word translated "kami" in the Japanese Bible was originally very ambiguous. And perhaps to clarify this ambiguity somewhat, the Bible uses not one but several words for "God.

When the Creator appeared to Moses, He introduced Himself by saying, "I am that which is," which is so philosophical and metaphysical that even we today cannot measure the depth of its meaning. How much more so was the divine knowledge of Abraham, the forefather of the Israelites? The Bible is not yet written, and what there was was based on Abraham's intuitive sense of God and on the Creator One revealing Himself to Abraham directly from time to time. Therefore, in terms of rational knowledge, it must have been far inferior to ours today. However, Abraham's knowledge and trust in God through direct communion and association with God was very deep. It is just like the knowledge we have of our mothers. Our knowledge is based on our experiences of being held, suckled, and held by our mothers from the time of our birth, and is different from the knowledge that a background checker has gathered from our own experience.

The Salvation of Abraham

It is important to note that even this knowledge of Abraham was sufficient for him to be justified. Abraham's salvation was not based on his rational knowledge of the Creator, but on an emotional trust rooted in his previous experience of fellowship. The Creator valued Abraham's emotional trust in his heart and the actions that resulted from that

trust more than his intellectual understanding of the Creator's mind.

Abraham was justified by trust (faith). In ordinary parlance, he was saved by faith. We are saved by the same trust. The only difference is that we were saved by trusting in Jesus Christ. We were taught the life of Jesus Christ and the atonement of the cross, believed it to be the true story, trusted in Jesus Christ as our Savior, and were saved. But Abraham was different. He knew nothing about Jesus Christ. He did not know about His self-abandoning birth, His perfect human life, His atoning death on the cross, or His resurrection to defeat the final enemy, death. He did not know about faith in Christ, nor the repentance he was told was necessary. Clearly, his salvation did not depend on faith in Jesus Christ as his Savior.

Who, then, was Abraham's Savior? Was there any other Savior besides Jesus Christ? Was there any salvation in Old Testament times that did not depend on Jesus? No, there was no such thing. There is only one Savior of mankind, Jesus Christ, who died an atoning death on the cross.

Our Knowledge or the Creator's Knowledge?

Old Testament people like Abraham were not saved by knowing Jesus Christ and believing in Him. Even if they did not know about Jesus Christ, the Lord of Creation did. Their salvation is not based on their "deeds of knowledge," but on the knowledge of the Creator, the fact that God knew all about Christ.

If this is so, it raises the question of whether it is possible to be saved without knowing Jesus Christ, even today. Even if, like the Japanese, we do not know the revelation of the Bible, have not experienced the direct manifestation of the Creator, have very limited knowledge of the existence of Jesus Christ, and have a great deal of misunderstanding and preconceived notions about Him, are we still required to have a correct understanding of Jesus Christ and His work before we can believe in Him? Is it required to believe in Jesus Christ and His work with a correct understanding? In the theology imported from the West, this may be the case.

But what about the actual teaching of our churches? How much knowledge do we expect and how much understanding do we demand for salvation in our churches? Even if we teach properly, how can we be sure that it will be understood correctly? I, for example,

have been an evangelist for more than 50 years, yet I cannot fully explain the mystery of the cross of Jesus Christ. On the contrary, I do not even understand it satisfactorily.

How much did the robber-murderer, who supposedly received Christ's promise of salvation while facing death on the cross, understand about Christ? Did his words have enough content to be accepted as a confession of faith or words of repentance? But I think that Japanese pastors and believers take words that seem to faintly capture faith and use them as comfort. The faithful-sounding words of a grandfather just before he died, or the Christian phrases of a mother to her Christian children before she passed away, may not be taken as proof of faith. More importantly, how many Japanese Christians are identified as Christians with a solid knowledge and understanding of Christ? I suspect that many Christians have joined the ranks of Christians without having made an emotional decision or even a decision, rather than an intellectual one, and think or are thought to think that they have become Christians.

If salvation by Christ required a correct understanding of Christ and His work as a prerequisite, the author and others would never have been saved. It is important and necessary to have some correct understanding of Christ and His work. But it should not be a condition for salvation.

What does the New Testament teach?

What about the New Testament teaching that "salvation depends on knowing Christ and believing in Him"? A straightforward reading of the New Testament shows that it does so, and even requires repentance. So, the author thinks, "What about the teaching of the New Testament? The New Testament is basically written for readers who have some or a fair understanding of the Old Testament, who have some knowledge of Jewish teachings, and who have some awareness of sin.

Indeed, the Apostle Paul, who wrote much of the New Testament, writes as if faith in Christ is an absolute requirement for salvation. Paul was also an apostle of Gentile missions and sent letters to Gentile churches. But we must well consider that the majority of his audience and readers were those who already had knowledge of Judaism and were also those who were waiting for Christ, the Savior. Paul wrote that way in Paul's day, in the terms of the people entrusted to him.

Paul wrote in the context of a given time and place, not with a universal audience in mind. It is not correct to assume that a particular teaching, written under given conditions, is a universal teaching as it is. While there may be parts of it that are universally applicable, not all of it is. Rather, there are many places where Paul took a universal teaching and adapted it to his own circumstances. The teachings that women should not braid their hair, or wear a veil, or keep silent in church, were universal teachings applied to the conditions of his time and place, and should not be applied to the present time and place of Japan.

In other words, Paul was not writing to an unprincipled Gentile like the Japanese. Furthermore, Paul, a brilliant Pharisee scholar, wrote from the "standpoint of the Jews" and insisted that the gospel was not limited to the Jews but extended fairly to all people of the world. From the Gentile perspective, the gospel was planned from the beginning for the salvation of all peoples, and he did not say that the Israelites were "chosen and used" to play an important role in the process. That is why Paul was able to suddenly skip the topic to Abraham while discussing salvation through faith in Christ alone.

Abraham was certainly an ancestor of the Jews, but he could not have been a Jew. He was from a time when the Law had not yet been given. And Paul, without any explanation, suddenly says, "Abraham believed God and was justified. He cites events that took place before the law was given to Abraham and asserts the validity of the doctrine that salvation is by faith. They pay no attention to the similarities and differences between faith in Christ and faith in God, the creator of the Old Testament era. In Romans 4:24, Paul says that we can obtain salvation by the same faith as Abraham, not by faith in Christ, but "by faith in God who raised him up. It seems that for Paul, faith in Christ and faith in God the Father were identical!

While accepting Paul's writings as the "inspired and infallible Word of God," we have a mission to free Paul's writings from the conditions of a specific time and place, to search out the universal teaching on which they are based, and to build and develop the theology we need today on the basis of that universal teaching. We have the mission to build and develop the theology we need today on the basis of that universal teaching. The teachings of the New Testament, not limited to those written by Paul, were basically written for Jewish Christians who had a fair understanding of the Old Testament and Gentile Christians who had some understanding of the Old Testament. Therefore, the Bible must be explained in a way that Japanese people, who do not know the Bible at all, can

understand it in their own way.

Repentance

For example, the New Testament teaches that repentance is necessary for salvation, but is this a teaching that should be applied to Japanese who have only a vague sense of the Creator of heaven and earth? At the very least, it was not required of Abraham. But Paul, for example, seems to insist that Gentiles must also repent when he tells a complete Gentile in Athens, "God overlooked those times of ignorance [of idolatry], but now commands everyone everywhere to repent. Or, in the presence of King Agrippa, Paul says, "Furthermore, I have preached to the Gentiles that they also should repent and turn to God and do deeds worthy of repentance," as if Gentiles also need to repent. How should we understand this?

The Greek word Paul uses here, "repent," did not originally have the strong religious meaning of "repentance," but rather, "change your mind. The word was used to express the Hebrew word for "repentance" when the Greek translation of the Old Testament, usually called the translation of the Seventy, was done around the second century B.C. The Bible was used by many Jewish people as the basis for their religious beliefs. Since that Bible was spread among many Jews, the word was given a religious meaning among Jews and came to be used to mean "repentance. However, we should assume that in Paul's day, the use of the word with such connotations was still limited to the Jews.

Paul would not have used Judaized Greek in Athens or before King Agrippa, but would have spoken in the original Greek sense. The people of Athens and King Agrippa should have used the original Greek, not the Judaized Greek. In other words, Paul was not calling for religious repentance like the Jews, but rather, he was asking them to change their "way of thinking and understanding" and believe in the Creator of heaven and earth. We can conclude that he was not asking the Gentiles to repent in the same way that he asked the Jews to repent. It is not surprising, then, that as time went on, the Greek word came to be widely used among Christians to mean repentance.

When we speak of repentance to the Japanese

I am not opposed to asking the Japanese to repent. In fact, I believe we must do so. But that is only after they have at least a firm and basic understanding of the Creator

of heaven and earth, the Almighty Absolute. After you have come to know the Almighty, who is kind and gracious, who makes the sun rise and the rain fall on both the bad and the good, then you can easily understand and even accept that you are a sinner. But if from the beginning you say, "You are a sinner," then you are a sinner. If you do not repent, God's punishment awaits you," Japanese people will only feel repulsion.

Personally, I rarely use the word "repent" in my evangelism. Instead, I say, "We are indebted to this gracious and noble One for everything. He has given us life. We have been protected. But have we properly repaid him? Have we not done so in a vague way? Are we not being ungrateful? Are you not being ungrateful? I ask. Or, "There is a word in Japanese called 'filial piety. It is one of the worst things you can do. But haven't we been repeatedly disobedient to God the Father, who has provided life, food, shelter, safety, and everything else? I ask. Most Japanese who have already been led to experience the gracious Creator God usually confess, "I have been unfaithful. I have been unfaithful to my parents," they confess. Then, with me, I pray, "I am sorry. Please forgive me," and then lead them to pray for forgiveness. This kind of repentance that seeks forgiveness is closer to the essence of repentance than the "prayer of repentance" that repents for stealing a hundred-yen coin from one's mother's purse.

The God that Abraham, Isaac, and Jacob knew.

One Christian that the author knew was a woman named Minako. I met and befriended her in Manila, but after returning to Japan, I visited her at a hospital in Yokohama when she was lying in bed awaiting death after suffering from cancer. She was a very bright and beautiful woman, and she spoke cheerfully without hiding her head, which had become like a nun's. "Not long ago, my husband finally died," she said. She told me, "A while ago, my husband finally decided to become a Christian! He told me that he had prayed to God. He told me that he prayed to God. It was a prayer that began, 'God of Minako. He said, 'I didn't know what to call out!

For a long time, the God of Creation was a God whom they did not know what to call. So the Israelites called Him "the God of Abraham, Isaac, and Jacob," with the names of their ancestors, Abraham, his son Isaac, and his son Jacob, who also believed in Him. The "God of Minako" is not to be denied either. With 8 million gods, many of whom have merged with Buddhism, "God, Buddha," and in the midst of rush hour crowds, "Oy. Instead, we should identify only one person and call him or her by his or her name.

Also, the Old Testament invocations to the Creator of heaven and earth were settled to a certain extent in certain words over time, but even if they were used as written words, other words were substituted when reading them if they were too awe-inspiring to be uttered out loud. Such a transition continued for hundreds of years, so that at last we no longer knew how to pronounce the word. It is only recently that the view has taken hold that this was probably pronounced "yah-weh". One pseudo-Christian organization, founded before Yahweh became the consensus of scholarly opinion, still uses the name "Jehovah," as it was commonly understood at the time, as their designation.

God the Father

The concept of God the Father is not unique to Christianity. Many religions have a similar concept. There is already a germ of the concept in Judaism, and the concept of what could be called Mother God is also in the same Judaism. Essentially, the Creator of heaven and earth has no gender. He is neither father nor mother. Thus this is only anthropomorphism. It is said that decades ago, a group of American feminists disliked the term "God the Father" and translated it as "God the Mother. On the other hand, many Japanese religious scholars, sociologists, or ethnologists also say that the Christian concept of "God the Father" has hindered the spread of Christianity in Japan. What Japan needs is not a strict Father God, but a gentle, compassionate, forgiving, accepting, and embracing Mother God. I see your point. We talk about Mother Earth and Mother Sea. The Christian God, whom we call God the Father, conjures up a hard image of a harsh, fearful, sin-punishing, smiting, and subjugating God.

Scholars who make such claims, however, probably know little about the teachings of the Bible. In the Old Testament, God was never called Father. He may have superimposed the image of Father and covered Him with the image of Mother, but He was too awe-inspiring to be called in such a way that would evoke human intimacy.

Christ used "God the Father."

It was Christ who changed this drastically, speaking and teaching clearly as "Father. The emphasis was on the image of a kindly Father who was close by to protect and help. Naturally, the image overlapped with the authority and power of the Father in the patriarchal society of the time, but overwhelmingly, the first image was of a powerful

and gentle Father who could protect and help. At a time when it was considered frightening to even utter His name, when the emphasis was on His transcendent nature, it was Christ who spoke of the intimacy of God, the closeness, the fineness of love that could be compared to the love of the flesh and blood. This was further emphasized by Paul, who taught that we can call him "Abba." Abba" is Jewish infantile language, a little more informal than "Papa," and probably means something like "chan.

Is it because they are polytheistic that they prefer harmony?

Also, Japan is polytheistic, accepting any god without contention. Such nature leads to a tolerance to accept any person. In comparison, monotheistic deities are always exclusive and contentious. Some people argue that this leads to an attitude of exclusion and strife in human society. This sounds plausible, but it is also a fallacious argument, since it is based on the Christian countries that have been at war with each other and some Muslims who are not afraid of brutality. It is also an argument that fails to define "God.

The same kind of beings as the Japanese "gods" are recognized in Christianity as various spiritual beings that are not covered by the name "God," and most countries are animistic and polytheistic. In many polytheistic cultures, there are also gods of war. Even assuming that it is true that the Japanese are inherently conflict averse, it is completely off the mark to say that this is because they are a polytheistic culture. The Japanese do not like conflict because they are an established culture on an island, centered on rice cultivation, where there are few foreign enemies. In a wheat and corn culture, where migration was easy, continental cultures were always surrounded by neighboring foreign enemies and had to be prepared for battle at all times. In a highly mobile pastoral culture, moreover, it was important to win the fight, and only small relatives were needed to get along.

Also, in a rice culture, fertility gods are not worshipped as much as in a pastoral culture, nor are they associated with sexual activity that is linked to fertility. Even if they do, it is not a direct sexual act as in the pastoral culture, but at best a "lightning bolt. This is not a male-female culture, but a culture that worships nature, which grows crops, and a reverence for the Great One who rules over nature.

Perhaps it is a God like a mother that is sought by the Japanese, who value kindness

and harmony. Christ taught that God the Father means God like father and God like mother. To speak of God the Father in contrast to God the Mother is the monstrosity of a thesis that quotes and talks about one thing after another that someone else came up with and then gives authority to.

Japanese culture's treatment of strangers

However, the "wa" created by the entrenched culture immediately leads to suspicion, exclusion, and discrimination against the "stranger" when turned around. The callousness, cruelty, and ruthlessness with which the Japanese judge strangers has manifested itself in a variety of very ugly forms of discrimination. Japanese people treat foreigners as "home" and treat them without discrimination, even if they are foreigners, if they are trying to understand the Japanese mind and trying to fit in with the Japanese people. However, even if they are Japanese, those who do not try to understand the hearts of others, do not try to blend in with the people around them, and do things on their own are considered "strangers" and excluded from the community. The Japanese will be kind to the newcomer for a while, but will carefully watch him to determine whether he will be an "uchi" (home) person or an "atsuya" (stranger). Once they decide that they are "strangers," they will say, "Hey, you're not human! and they will be violently excluded or harassed, if not killed, as in a samurai movie. This is what is called "Hachiboku" in Japanese, and it was actually done.

This character of dividing and punishing people "inside and outside" can be completely changed if we come to understand the existence of the gracious Creator from a place that valued harmony through mere lifestyle and culture. We will be able to recognize that conflict and discrimination are contrary to the Creator's will, and we will be able to repent. Instead of simply apologizing to those who have done terrible things, we will be able to apologize to our Creator, who created us as objects of His love.

In Old Testament times, God revealed Himself as a strong, harsh, and punishing Creator. He did this in order to teach and guide Israel, a weak people who quickly fell into sin and went astray, and to make them fit to receive God's only begotten Son, the Savior. This required not only open trust, but also complete obedience. There were many powerful peoples around them who were looking for an opening to attack, destroy, or enslave Israel.

God is at pains to protect the nation of Israel. After all, we are not dealing with a mindless object, but with a human being to whom God has given free will. In order to respect man's free will, even God Almighty did not always do as He wished. The Israelites were like the sons of Dora who were surrounded by scoundrels who wanted to take their ransom, but they were oblivious to their surroundings and kept on doing evil and making mistakes. Like a father who struggles to make his son grow up to be a decent human being, the original kindness and compassion of the Israelites is withdrawn, and harshness and severity are revealed.

The God Christ portrayed

The God Christ taught is the same God, but a tender, embracing God, rich in grace and compassion. He admonished, "Since He is the God who feeds the birds of the air who neither sow nor reap, why should He not do you more good? He was shining a light on the Creator's original tender side, which was hidden in the Old Testament, namely, His mercy, compassion, and care for the people.

And while the Old Testament focused on peoples and nations, and with few exceptions, on great men and giant leaders, Christ's teachings focus on a single person, especially a weak, poor, and small individual. The infinitely great and powerful God, the Creator of heaven and earth, is portrayed as one who gently reaches out to those who lived tremblingly on the fringes of a trash heap-like society. The God Christ depicts is a God who is more pleased with people living a life of generosity, not worrying about tomorrow, and putting all their trust in Him, than with people living a clean and righteous life, strictly following the teachings without fault. It is this trust that makes it possible to live a clean and righteous life.

Japanese who do not understand the parable of the prodigal son

Christ taught us about the kindness and mercy of God the Father in the famous parable of the Prodigal Son. It is a very moving story. Perhaps the Israelites understood the parable better. It may also have made sense to many Western Christians who lived in a Christian culture and mistakenly believed that they were the spiritual Israel, the true Israel, etc. But to the author, it did not ring a bell at all. However, for the author, it was a story that did not ring true at all. It was a story that I could understand, but I could not apply it to myself and understand it. I guess I was a slow learner and had a

hard time understanding it. But I think the fact that I was Japanese had a big influence on me. To be honest, it was not until long after I became a Christian that I came to understand.

It was not impossible for Israelites to imagine God as Father, regardless of how they called Him. It was quite normal for people with a Christian cultural background to think of God as Father. However, Japanese people do not have the sense of "God the Father" in the first place. Nor do they remember leaving home without God the Father. Nor have they ever been consumed by debauchery. Therefore, there is no way that this sinful son could ever understand that he was the Father. Even if he were given an explanation, he would not be able to accept it with a sense of reality. It is impossible for him to return to his father, whom he had once abandoned, in deep repentance.

Christ's parable of the prodigal son is also directly addressed to a particular people, the Israelites, and not to everyone in the world. It was never intended for everyone in the world, much less for the Japanese. It is natural that Japanese people cannot understand it. In order for the Japanese to really understand the story, it is necessary to dig out the universal aspects of the story of the prodigal son and retell it in the context of Japanese culture. To do this, we must first get the Japanese to understand the concept of "God the Father. Without understanding God the Father, God the Creator, it is impossible to understand this story or the teachings of the entire Bible.

The story of the woman I met in the hospital

Last year, we sent a woman to God. She was hospitalized with a serious illness with absolutely no hope of recovery, but when I first met her, she was a very ordinary suffering Japanese. When she learned that I was a pastor, she seemed more than a little annoyed and asked, "Are you talking about the Christian God?" I replied, "No, it is not. I want to talk about the One whom I think you must have felt deep in your heart ever since you were a child. Let me tell you about the One who is big, noble, kind, strong, righteous, and gracious, who makes the sun rise and the rain fall on both the good and the bad. It took us about four months to get to this point, meeting once a week for five to ten minutes.

Then I told her how gracious and kind the Maker of heaven and earth is and how much He loves us. When she was feeling well, we talked for about 30 minutes. I also taught her to trust in the Creator of heaven and earth, the One who also made human beings,

calling Him God the Heavenly Father, and to entrust everything to Him, living as a bird of the air. He also taught us to be thankful and rejoice that we have been given life and that we are alive, to say thank you to God the Father, and to worship Him. Eventually, I was relieved to see the peace of trusting in the Infinite God who rules both the earthly and the other dimensions.

After a good six months had passed, she began to say, "I am not a good person. How could an ugly person like me approach and pray so brazenly to the One who is so great, so noble, so precious?" I told her, "Feel free to approach, pray, and be pampered. In truth, it is impossible for a dirty person like us to approach Him, but He has already solved all our problems Himself. He has prepared everything so that we can approach Him without fear," I told her about the redemption of His only begotten Son, Jesus Christ. She did not ask a single question. She simply listened with gratitude and joy all over her face.

Then I told her that her biggest problem was her unrighteousness toward her Maker. She had received so many great blessings, but had not properly expressed her gratitude. I also told her that this is a kind of filial disobedience to the Creator, similar to that of a parent's filial piety. I also taught them that this is what Christians usually call sin. Then we prayed together to apologize for our injustice and unfiliality.

I have never seen her standing up. Of course, she never came to church meetings. However, for a little less than a year from then until she was called, she spent her time with our church members, who came to visit her one after another, in joyful conversation, in prayer of thanksgiving, and in true peace and joy. I learned that the most important thing is to honor God and love others, so I began by praying prayers of thanksgiving and praise even in my bed, and cheerfully greeting the nurses and cleaners. She made use of her dexterous hands to make various origami crafts and gave them to those who took care of her as a thank-you.

I never talked to her about sin, repentance, or the cross of Jesus Christ until she asked me about it. It was only when she realized that the Maker of heaven and earth was the One who had given her life, the One who was precious, great, and kind to her, the One she had felt deep in her heart since she was a child, that she realized she was not worthy to be in the presence of this Maker. When she asked me about it, for the first time I told her about Christ, the Redeemer whom God had ordained. The author does not know at what point in time she was saved, whether she acquired eternal life, or whether she

became a child of God. It is God's domain to determine that and not our responsibility. But I am certain only that she has ascended to heaven where her nationality is.

It was only a short time between the first time we met her and the time we sent her to heaven. I think the time we actually met and talked with her was also very short. But it was really a stumbling blockless evangelism and guidance. She was the third person I have led through this kind of evangelism and sent to heaven, following an 80-year-old man and his wife two years ago.

The Problem of Original Sin

One of the major factors that make evangelism in Japan difficult is the concept or theology of original sin. This is a uniquely Christian teaching that all human beings have a sinful nature and are incapable of sin. This original sin is an absurd teaching that all human beings inherit the sin nature as a result of the sin committed by Adam, the ancestor of all human beings. The guilt that leads the protagonist of the aforementioned icebreaker to commit suicide certainly stems from the understanding of original sin that existed in the author, who was a Christian, but that is not the teaching of the Bible. Rather, it is closer to the common Buddhist sense of "the cause and effect of parents repaying their children. Although absurd, it is also true that almost all traditional Christian churches adhere to this teaching.

According to Western Christians, Christians have received God's salvation and are forgiven of their sins, but most Japanese are not Christians and therefore remain sinners, ruled by original sin. Therefore, Japanese culture is a culture of sinners. Japanese education is the education of sinners. Japanese politics is the politics of sinners. The conversation of the Japanese people is the conversation of sinners, filled with lies that only mend the surface. The whole nation of Japan is built on sin. Therefore, many missionaries from self-proclaimed Christian countries have condemned Japan as an idol nation, denounced the Japanese as sinners, and accused the Japanese of being stubborn and unrepentant of their sins. But the Japanese did not understand the sin of repentance. Spurgeon, one of the greatest preachers in the history of Christianity, taught, "When you speak of sin, speak so fiercely that you feel the heat of the fires of hell. They tried to lead the Japanese to repentance by passionately telling them about the hell of punishment for sin.

They may have imitated Christ's condemnation of the Jews as sinners, but there is a big difference between the Jews being condemned as sinners and the Japanese being condemned as sinners. The English, living in a long Christian culture, are condemned so severely for their sins that they can feel the heat of hellfire, while the Japanese, who have never heard of the Bible, have no church, and have never even heard of the God of creation, are condemned in the same way, with a completely different result. Again, much of Christ's condemnation cannot be applied to the Japanese because they did not have the Old Testament, which contains God's law. The Bible teaches that what is without law cannot be judged by law. On the other hand, there was also the unwittingly superior, American theory of Japanese culture that said things like, "The Japanese will never understand sin, and Japanese culture is a culture of shame. But the Japanese had a culture of defilement, of knowing their own defilement toward the invisible and noble One. Paul said that there was sin before the law came, but it was only after the law came that it was recognized as sin. The Japanese, who did not have the law, could not possibly be aware of sin as the Bible teaches. But because of their human nature, created in the image of God, the Japanese were ashamed of themselves before an invisible being.

The Manchurian Incident, the Greater East Asia War, and the Pacific War were all caused by the schemes of bad Japanese politicians and military, and the Japanese were forced to fight against the U.S., Britain, and other nations, eventually suffering divine punishment and losing the war. It is true that the Japanese people committed many crimes in the last war. That is a fact. When interpreted in the common Western Christian way, Japan, a nation of sinners, recklessly launched a war against the United States and Great Britain, which were thriving with Christian culture, and lost the war by receiving the divine punishment of the atomic bombing. Such absurd statements were spread even by Japanese evangelists. Has there ever existed a nation that has never committed a crime while fighting a war? Was there ever such a nation?

Original sin, which teaches that the nature of Adam's sin flows in the blood of mankind and extends to all descendants as if it were inherited, is a Christian idea and theology brought from the West, but it is not a biblical teaching. The Bible clearly teaches that the sins of the father do not extend to the offspring. The consequences of the father's sin may be passed on to his offspring, but sin does not become the nature of the offspring. This teaching of original sin is an attempt by the old church to forcefully explain the biblical teaching that the consequences of Adam's sin are passed on to all human beings, without a proper study of the Bible.

A Correct Understanding of the Consequences of Adam's Sin

The Bible teaches that all human beings are born sinners. We are conceived in sin and born in sin. However, the sin nature was not passed on to all humans as an inherited trait. Our sinful ancestors, Adam and his wife, were banished from God's presence, and they begat children and formed human society under circumstances that did not allow for much direct interference from God. They formed their own society in a world called "this world" or "this generation," where sin separated them from God and the devil ruled. Strictly speaking, there is no such thing as separation from God, but we have been put into a dimension that is not directly ruled by God, but by the devil. This dimension ruled by the devil is taught as "this world" or "this generation" in the New Testament teachings of Christ and others. There, the devil is in the heavens, as he is called "the prince of this generation" or even "the god of this world. Man, apart from the direct rule of God, may think he has formed human society of his own free will, but in reality, he has created a culture under the control of the devil, in the bondage of sin. All human beings born in this culture are born in sin. They were carried in the bondage of sin.

The Japanese people's sense of being "Japanese" is unique, and the blood of the Yamato race has been cherished. Therefore, for example, if a third-generation Japanese American immigrant to Brazil has Brazilian citizenship and speaks only Portuguese, he or she will be ridiculed, "You are Japanese, but you can't speak Japanese! If a third-generation Japanese immigrant to Brazil, for example, has Brazilian nationality but speaks only Portuguese, he or she will be ridiculed. However, in other countries, such as the U.S., even if a mother is flying over the U.S. on a sightseeing trip and suddenly gives birth to her child there, the child will be given U.S. citizenship. Everyone born in a country becomes a citizen of that country. According to the biblical understanding, the world we live in today is a nation ruled by the devil, and all human beings born there live under the power of sin. Therefore, human beings are forced to sin and are called slaves to sin. The Church of the time, which did not yet understand the central theme of Christ's teaching, "the Kingdom of God" or "the dominion of God," was unaware of the concept of being born into the devil's kingdom or the devil's dominion, and thus developed a ludicrous theology such as original sin.

The Bible teaches that Japan, the U.S., every Christian nation, Buddhist nation, and Muslim nation are all under the control of the devil. The Christian culture is a remnant

of an 18th- or 9th-century dream, and does not exist. How many Christian nations have a higher culture than the Japanese, who know neither Christ nor the Bible? They know the Bible, they know the Creator of heaven and earth, and they even know the resurrected Lord who is alive and working today, so it is only natural that they have a noble spirit and culture. And yet, they have only that level of spirit and culture. The gospel Christ preached is called the gospel of the "kingdom of God" (the dominion of God), which makes possible the direct intervention of God to human beings living in this satanic dominion, and gives them the hope of new life through the power of God. That is the gospel of the Kingdom of God, and we are encouraged to be born into the Kingdom of God, to be "born again" or to have a "second birth.

Contrasted with the dominion of the devil, the kingdom of the devil, is the dominion of God, or the kingdom of God. Beginning with the teachings of Christ, the theme of the New Testament is precisely the coming of this Kingdom of God, and the question is how to enter this Kingdom. Man was born into a world of sin under the dominion of the devil, and was born into the bondage of sin, which makes it impossible for him not to sin from birth. Therefore, Christ says, "Enter the Kingdom of God. Be born again. He strongly advised us to be born again into the Kingdom of God. To do so, repentance was an important requirement. But this recommendation to repent was given to those who already knew well the Creator of heaven and earth, the One who created mankind, and the One who continued to save and help His people. The Creator encouraged those who worshipped Him with reverence and fear to repent. He was not speaking to those who did not know Him.

In order to truly repent, it is extremely important to first know the Absolute One who created the heavens and the earth, the One who created and nurtured you, the One who is great, noble, strong, kind, and compassionate. The first important thing to encounter in evangelizing the Japanese people is to show them the Creator of heaven and earth, teach them how wonderful it is to pray to Him as "Heavenly Father," and have them experience His grace in many ways. Then, of course, they will realize that they have been repeatedly unfair to God the Parent and that they have continued to be unfilial to Him.

Conclusion

When I talk with people who are thinking about the future of missionary work in Japan, it seems that they are all focused on methodologies and measures. That is not a bad thing.

Since 1969, I have been pioneering what is now called the "cell method" for many people. Because of this, I was scolded by the great pastors who were the examiners for the regular teacher examination (the examination to receive the laying on of hands), and I was dropped with flying colors. It was an outrageous thing to do at that time. In parallel with such a way of doing things, evangelistic pastoral work by believers was also tried among the unreached tribes in the mountainous areas of the Philippines and among the tribes in the plains, and it had some success.

But what I am trying now is not just a method or strategy. What I am attempting now is to begin with a more biblically grounded theory of mankind, to extend to the perception of God, to reexamine and study the Japanese people, and to speak of the gospel as it is also for the Japanese people. The gospel has been about all mankind from the beginning. We are neither partakers of the gospel for the Jews nor leftovers of the gospel for Westerners. From the beginning, the gospel was for the Gentiles and for the Japanese. Because it was given through the Jews, it has been revealed and explained to a specific ethnic group, the Jews, and their culture. The gospel has also been understood and accumulated in the white culture and environment of the West, and has been constructed to suit the convenience of the white people of the West. Japanese people cannot understand or accept such a gospel when it is brought and presented to them.

What we need now is to separate our understanding of the Bible from Jewish culture and Western white culture, search for universal principles, and apply those principles to Japanese culture. One of the most important aspects of this process is that human beings are created in the image of God the Maker, and even though we have sinned and left God, twisted and bent and destroyed, that image of God's image still remains and has not disappeared. This is a much more basic principle than the vague theology of "original sin. Japanese who better retain that God-like image should know that they instinctively feel their Maker.

When we preach the gospel, it is effective to begin with the image of God, which remains quite clear in the Japanese, as a bridge. Many Japanese will not understand or be saved by evangelism that condemns sin, encourages repentance, and encourages them to believe in Christ the Savior. Abraham believed God and was justified. Japanese should also believe in God and be justified. You are not saved by your own understanding of the gospel of Christ, but by the knowledge of God, who planned and carried out the gospel of Christ and made it effective for all nations, without works and without understanding.

When they are saved and have a deeper understanding of God's grace, the Japanese also have a deeper understanding of their own sin and uncleanness. Without a proper knowledge of God, there is no true understanding of sin. Therefore, Japanese repentance takes place after they believe in God. When we realize our sinfulness before God's love and grace, the atoning work of Christ shines through our whole being with a sudden radiance.